

ニホン英語 (*Open Japanese*) の類型化研究 (9)

— 「‘宿命’の心理学」から「‘心ひとつが我が理’の心理学」へ —

末 延 岑 生

はじめに

若き日に、世界中の人々が平和に助け合って生活するために必要なこと、それには人々が互いにコミュニケーションできることだと考えた。中学生になった時には、早くも英語の教師になろうと決心していた。

冒頭から私事で恐縮だが、生涯の仕事として決心し、恐る恐るながらも胸を躍らせて踏み込んだ英語教育の世界も、そして英語教育に役立つと思って入って行った心理学の世界も、中に入ってみれば学問以前のさまざまな問題を抱えた世界であった。中でも言語学、心理学の世界は、世の中を明るくするためのはずの学問研究にしては、どうしてこんなに影の面がはだかっているのか。人がより良く人間らしく生きるためにはどうすればいいか。そのために本来学問というものがあるのではなかったか。

竹馬の友がつぶやいた。おれらコンクリート・ジャングルに住んでいるのと同じ人間が、アフリカの過酷な大自然の中で猛獣の脅威と共存して生きとる。一方、昔ローマのコロシウムでは奴隷と猛獣を戦わせて奴隷が喰われるのを見て興ずるやつらがいたが、そいつらのやっていたことは今の連中と変わらん、と。今どきの人間にとって、学問というのは人間観、教育観を一つ間違えれば、ちょうどこのコロシアムの猛獣のような嚇しの象徴であると同時に、物質的に豊かな人々のための享楽の象徴にすぎないのではないかと。

学問というのは人間どうしの共存共栄のための大切な媒介となるか、それとも人を脅して興ずる材料となるか。それは人間、学問に対する観点の問題である。言語を通じて人類共存のコミュニケーションの夢を絶望的にさせないためにも、本稿ではまず“怠け者の心理学”ともよばれるほどの、そうした消極的な伝統的心理学、哲学、宗教学、言語学の傾向を、人間の我がの理としての心に加えて、科学の英知をもって覆し、今世紀の積極的な健全心理学を打ち立ようとしてきた人々の、平和に向けての努力とその発想を辿る。そしてそれらを土台として、20世紀後半から半世紀の間に日本の言語学・英語教育が、心理学の動静とともに辿ってきた道のりにおける諸問題を紐解きつつ、その失敗を繰り返さないがための、本来あるべき姿を提唱するのが本稿の目的である。

I. 宿命の心理学

心理学の歴史

大まかに言えば、BC 4 ~ 5 世紀にかけて、プラトンやアリストテレスは知的な市民を育成するために哲学しながら心理学、中でも市民をよりよく育てるための、今でいう「教育心理学」の基礎造りをしていった。心理学は学問の中でも最も長い歴史を持ちながら、18 世紀の後半までは哲学・神学の一部であったが、心理学がよきにつけ悪しきにつけ一躍進歩してきたのはこの 1 世紀余り、1879 年 W. ヴンドが科学的な手法を駆使して観察と実験をするようになり、1908 年ハーバードの社会心理学者 W. マックドゥガルが心理学を「行動の科学」と定義して以来である (シュルツ, D. 1986 p.3)。

その後、急速に発展を始めたのは第二次大戦以降だといっている。大戦ですさみきった世界の人々の心をいやすにふさわしい内発的動機付けの研究など、積極的な心理学の再登場であった (波多野 1973 pp171-75)。今やその学問分野においても心理学は、教育・医学はもちろんのこと、建築、工業、商業、デザインと多領域にまたがり、心理学に無関係の研究分野はない。しかしそこに過去から引きずってきたのが心理学に対する伝統的・因襲的な考え方、それは皮肉にもすでに紀元前から人類にじわじわと影を落としてきた、なかでも人を幸せにするために存在するはずの宗教面・教育面に問題があった。その元となったのは何か。

フロイト主義

いままで多くの輩出されてきた心理学者の中でも、オーストリアの神経病学者であり精神分析の創始者であるフロイト, S (1856-1939) は、半世紀以上にわたって現役を守り、いい意味でも悪い意味でも多大な影響を与え続けた心理学者であり、その生涯にわたる数々のフロイト理論はたえず衝撃的・個性的なもので、彼の影響を受けなかった心理学者はいない。

当時、ダーウィンの著作から大きな影響を受けたフロイトから見ると、人間は地球上の偶然的な進化の産物にすぎず、単なる動物でしかなかったと考えたようである。しかしその後人類は動物界を支配するにしたがって、不滅の魂を獲得することで彼らとの関係を解消し、髪の毛一本つukれない人間が、神の子として君臨するようになったという (フロイト, S. 1958)。

さて西洋文化の中には、ダーウィンの人間も動物もその源を同じとする考え方の解釈による影響で、フロイトをはじめ多くのクリスチャンの理論家たちが考えてきたように、人間の本能を動物的で悪とし、その裏面を強調する傾向があった。これはフロイトに代表さ

れる宗教的観念であり、その土台として西洋では宗教、なかでもキリスト教の影響が大きな位置を占めてきた。それは西洋に限らず、東洋でも長い暗黒の封建時代を潜り抜けてきた歴史を読み解くと、権力者たちがそこで作りあげた下位の人間を、動物と同じように扱う暗い文化を持ちあわせていることがわかる。

人間の原罪

キリスト教は世界で最も影響力のある宗教の一つであって、その教えは世界の人々の心の糧として家庭から社会、国家へとあまねく広がっている。筆者は信奉者ではないものの、青年時代にキリスト教プロテスタント系の教育を受けた後、そこで教師となり、およそ15年にわたってその薫陶を受けた。ともすれば急進的な思想に走りやすい時代に、自分なりの心の成人をさせて頂いたことを感謝している。

さて、キリスト教の信者の大半を占める西欧では、人間は生まれながらにして原罪を背負った罪びとであり、この世を死んで再び戻る場所ではなく、非安住の世界と見る。筆者はこのことだけは理解に苦しんだのだが、信者たちから見れば、自分たちがそう信じさせられてきたから、当然、世界の人類もすべて原罪を背負った人間だと見るのはごく自然なことである。

原罪ということばは『旧約聖書』《創世記》第3章に見られ、禁じられた木の実をイブが蛇に誘惑され、次にアダムがイブにそそのかされて食べ、ついに二人は神に罰せられた結果、これを契機として二人の罪は全人類の罪として、世界中の人間にはあらゆる生の苦しみ、罪と死とのろいが転がり込んだと記されている（前田 1995, 末延 2004 pp26-8）。

この象徴的な禁断の林檎を食べただけで罪を負うという、このひんしゆくを買うべき謎めいた罪の物語の根本には、個人の意志の腐敗によると見なす罪と、個人としてはどうにもならない遺伝的な罪があり（徳善 1998）、人間の元といわれるこの夫婦の罪が21世紀の今に至っても受け継がれて、神が世界の全人類に下した罰と教えられてきた。仏教でも個人の罪とともに遺伝的な“悪因縁”を業として位置づけ、これに自覚を持たず反すると地獄に落ちるといって、これを“お仕置き”と見れば両宗教の罪の考え方には根本的には大した相違はない。

この仕組みは誰がなぜどのようにして造ったものかは明確ではないが、ただ共通点は、日々直接神に仕える人たちは、信者を神の思召しに正し導くための戒めとしての存在造りの結果としてのルールであると同時に、西洋の宗教改革者 M. ルターが強烈に指摘したあのバチカン建造時の免罪符のばらまき（松田 p21）のように、宗教内部での脅しや世界に散逸する封建制度の誕生にも貢献したことだろう。

幼少時期に地獄の話や罪の話を聞いて夜も寝られないで苦しんだ経験を持った人が多い

のもそのためであろうが、今でも、先祖が地獄で苦しんでいるからと弱者から多額の賽銭を脅す、まさにルターの宗教改革を髣髴させるような当時のえせ宗教がいまだに世界中に蔓延している。こんな人こそ誰もが認める本当の罪びとというのならわかる。

ただ、ここで神の存在を考えれば、どの宗教についても、たぶん神が初めて人類の心の中に入り込む以前（以降かもしれないが）に人間社会の中に実在していたのは、王と民であろう。王は自ら（あるいははずる賢い部下が王に付度して）を天に住まうほどの高貴な「天子」（長尾 2010 p48,95,102）として据え置き、同時に家来の民を地を這う者として地に置き、まさに“天と地”の関係を誰もが否定できないほどに「科学的」「言語的」に造り上げ、彼らに崇拜対象として崇めさせた。

自然の生活の中から、人間が度々経験する自然の驚異から生まれる人々の純粋な畏敬の念が出現するとともに、それを神と名付けその存在が定着した。天子は神を畏れながらも、人間の中では天子であった。そこでは当然ながら天と地にも例えられるほどの人間間の差別が生まれ、それが西洋、東洋あまねく人間の住むところに威力を発揮、それは封建制度と化し、西洋や中国では国家の構成にはなくてはならないシステムとされ、いまだ（一部では）現在に至っている。

日本の封建政権を長期にわたって支えてきた朱子学（pp64-75）では、自然界の道理を模して、人間社会で守るべき正しい関係の基本的基準を次のように設定する。それは自然のいとなみから「全宇宙の絶対の真理」を探ることである。第一に、誰が見ても宇宙空間で天が最上位にあり、地は最下位にある。これぞ自然法則である。よって人間界でも天は親・君主に当たり、地は子・人民に当たるのが当然の理だということである。

そこで人間界の絶対的真理「五輪」という基準を設けた。すなわち ①親子愛、②君主への義、③男女の立場の区別、④長幼の序列、⑤朋友の信頼である。つまり「下は上に従え」というこの絶対ルールを「理」といい、逆らうことは許されない。しかもこの道を知らず、守らない者は、「人の皮をかぶったケダモノ」であるという。ゆえに「五輪」は敬うべきものとされた（pp37-8）。なぜなら人間の内部には、自然法則によってこの「理」という絶対ルールが生まれつき“強制”的にプログラム化されているからだという。権力者にはそれが無いというのだ。このように、朱子学では、人間の心さえ、なかでも下の者は生まれつきの上下関係の基準に従うべく、プログラム化されているものとされた。キリスト教でいう、まさに原罪である。

さて、当時共に儒学の一派であった陽明学は、朱子学をどのように見なしたのだろうか。天と地が人間の上下関係を象徴するなど、まるで子どもだましの単純なすり替えではないか、と若い陽明は自問した。しかもこの「五輪」には嘘がある。②の「君主への義」だ。なぜなら君主はたいていむごい戦争などで勝ちぬいた者たちであるから、その地位や価値

は変化するが、他の四つは不変の自然法則、事実である。これが不変で正しいというのなら民衆や子女は地に相応して地位が低く、生まれつき主君に対して敬うための洗脳されたロボットということになる。だから君主や長に従わない民衆や子女は、悪人、罪人ということになる。これは「理」ではなく「無理」である。原罪も同じである。

陽明は言う。人間はロボットではない。朱子学こそがこうして人の心に入って操作し、人の心を蝕んでいる、と陽明は訴える。陽明学では、人の心は大自然とともにあり、心そのものが自然であるとする。すなわち、我が「心」そのものが「理」であり、人のありのままの心が「理」そのものであるという (p65)。以上のように、陽明学は人間には本来、上下関係さえ存在しないという倫理観から出発している。これに対して朱子学にはまさにボタンのかけ違いがあったのだ。

A.H.マズローの心理学

こうした傾向に対して、アメリカの産業心理学者 A.H. マズローはあえて口火を切る。フロイト派の心理学では、「フロイトばかりか、ハミルトンも、ホップスも、ショーペンハウエルも最良の人間よりも劣等な人間を観察することによって、人間の本性に関する結論を得ていた」という (ゴープル 1973 pp21-22)。これは明らかにフロイトのみならず従来の心理学者たちが脳裏に抱えていた、罪人としての人間の本性を探るための唯一の方策だと信じ切っていたことを暴露したものと考える。さらにマズローは付け加える。もしこうした心理学の研究者たちが、選りにも選ってこのまま、狂人やノイローゼ患者、精神病患者、犯罪者、怠け者、精神薄弱者といった人々に限っての研究に限定し、それに没頭したら、人類の希望はいったいどうなることだろうと。

さらにフロイト派の心理学では人類は常に快樂を求め、恐れ、不安、苦痛から逃れようとし、また、発達過程で子どもは抵抗を示し、攻撃的で、非協調的だと見る (p109)。それは人間が動物にその源を発するというのだが、原罪と成長は相反するからそれに抵抗するのが人間という理屈だろう。それに対してマズローは、そうした逃げ場のない世界で人はなぜ成長することができるのか、逃げから成長はないと反論する (p95-6)。

さて、現代の心理学を代表する 2 つの勢力がある。1 つ目は、前述したような「伝統的心理学」と呼ばれるもので、別名「怠け者の心理学」(波多野 pp 2-21) とも呼ばれる。くり返すが、原罪と成長は相反するから、それに抵抗するのが人間という理屈の理論だろう。一方、マズローはそうした利己的傾向も人間の本来的なものだと認めた上での改革を、という考え方だ (p69)。

次章で取り上げるアメリカの心理学者マズローも、子どもを観察すればするほど、健康な子どもは成長し前進するほど、能力、力を獲得することを自ら楽しんでいることが分か

ってくるという (ゴープル p105)。

II. 意識の改革

本章では従来の伝統的心理学に対する、新しい心理学のための意識の改革について述べる。教育の世界では心理学研究の大切さにもかかわらず、立ち遅れてきた理由は、筆者の経験からすると、被験者である学習者、子どもたちは学習権を持ちながらも、いつも大人の権威ある教師から学ばされている小さな無力で消極的な被験者であり、学習の遅れはすべて学習者側の責任にされる、一種の封建制度の中に置かれていることである。

教師は教室ではいつも天守閣の殿様であり、学生たちはいつも家来である。筆者は教室に次のような場面を設定して実験したことがある。教師の筆者が50名の生徒たちを全員起立せ、彼ら全員を相手にジャンケンをする。筆者に負けたものは敗者として次々と座らせてゆく。最後に一人の学生と筆者が残る。私がたまたまその学生に“はじめて”勝つ。そこで全員に即、たずねた。「この部屋で一番ジャンケンが強かったのは誰ですか。」

瞬間、全員が一斉に「先生」と答えた。筆者が今までに行った心理学の実験の中でも、これほどの衝撃的な結果を得たのは他にない。ついでにもう一つ。「戦争がはじまったら戦争に行きますか？」一人が口火を切って「みんながゆくといえれば自分も行く」というなり、全員が同調した。教育の荒廃はここまで来ている。このたび戦争法を制度化し、今度は改憲までする。「18歳選挙権」を発明した内閣政府は、恐ろしいほどに今の教育の“成果”を見抜いていた。彼らはこのからくりを知っているのかどうか。世界には戦争から得られる特需に向けて政府と組む死の商人が暗躍する一方、平和を求めて荒廃した心理学の現状を改革しようと努力する人たちが、この20世紀の後半からぼちぼちと出て来た。そうした人々の改革について見てみよう。

マズローの心理学と英語教育

A.H. マズローのようなものづくりの産業心理学や労務管理など、ビジネスのための心理学の世界に身を置いた心理学者は、実験の被験者は子どもではなくほとんどが大人であり、彼らは積極的な意見を持ち、自分に不利な仕事や待遇には瞬時に抵抗する力を持ち、それは即企業や会社の損益につながるからである。たとえやる気があっても、自分にとっていやなことには積極的に怠け者と化す力を持っている。しかもそれは集団的に、である。

マズローは伝統的な従来の心理学に対して対象を人の成長や失敗の数々の例に目を向け、多くの意識改革を提唱している。ここではそれを参考に、英語教育の観点とともに伝統的心理学からの脱出、失敗から成功への心理学の考え方、つまり新しい心理学への意識改革について述べる。

第三勢力としての改革

マズローは自分の進むべき心理学に意識改革を進めた。それは心理学界の第三勢力と呼ばれ、その内容はフランク・ゴープル著『マズローの心理学』(ゴープル, F. 1973) によって産業心理学の非専門家にも理解できるように詳細に記録されているので、それをもとに教育心理学、なかでも言語教育心理学の立場から 12 項目に分類し、順を追って考察する。(1) この改革は心理学の動静に偏ることなく、有益なものを抽出し活用する改革として、伝統的な心理学に見られる成果と、新しい心理学との両方の心理学の成果の中から、時代を問わず人類にとって有益なものを見定めて抽出し、そこから前進しようとする取捨選択の試みである (p20)。

(2) 心理学があまり科学主義的になりすぎると、親切・寛大・友情・愛・幸福・喜び・充実感・平和な心・満足・楽しみ・遊戯・安寧・意気・健康・喜悦、さらに慰み・美・芸術…というような、人間にとって最も重要な側面を軽視することになると警告した (p21)。

この傾向は心理学者たちの特有のものではなく、言語学者の中にも散見される (田中 1986 p19, 2003 p141)。科学を比類なきものとし唯一とする思考を持つ“言語科学者”たちは、このような科学的に説明できないもの、抽象的なもの、“科学的精密さ”をもってしてもその存在を具体的に証明できないものは、たとえそれが人間存在の意義からしても重要な意味を持つものであっても、科学に服従するあまり臆面もなく切り取ることで解決するという逃げ口上を持っている。つまり、心の存在を除外することに躊躇しない。ところが言語は人間の誕生に沿って準備され、醸造されてきたものであり、科学的思考の重要性は認めるものの、たかが数世紀程度の歴史しか持たない科学の産物ではないのである (末延 2017 pp112-3)。

(3) 攻撃性の意識改革として、世間だけでなく心理学者たちの間にあっても、ダーウィンやフロイトが人間が動物の野蛮性を引き継いでいると強調する中であって、マズローは攻撃行動は人類よりもむしろ動物のほうが少なく、協調性も豊かという。彼がこうした事実を生み出した背後には、残酷さや攻撃性、社会内敵意はゼロに近い温厚な民族といわれるブラックフット族インディアンたちの人格研究によって、人間の攻撃性は遺伝より文化の結果という確信を得たからである (ゴープル, F. p18)。

(4) 人間の本能の意識改革として、人間の本能は強いというよりもむしろ本来弱いものであるから、悪習慣、貧弱な文化的環境、間違った教育が成長を抑止してしまうという (p95)。その弱さを初めから認めているからこそ、単にエラーを毛嫌いし、ただ叱るだけという間違った教育は決してしてはならない。そのかわりに動物には成功の代償としてのエサを、学習者には声による心からの励まし、褒めることが大切なのであろう。

(5) 苦痛回避意識の改革として、フロイトは人類は常に快樂を求め、苦痛を逃れようと

するというが、快樂も時には不可欠なものであるものの、人間のあるマイナスのまづい側面だけを強調するのは間違っているという (p94)。人間の弱さをきっぱりと認める一方、時には苦痛に対しても積極的に立ち向かう意欲、力があると考えたのではないか。しかしその力のはじめから備わっているものではなく、微弱ではあるが、激励や訓練によって伸びると考えたのだろう。

そこでマズローは逆戦法で攻める。ではなぜ人間は進歩するのかと問い、カシの種がカシの木になるように人間は本性の中に健康への意志と能力を持っているという。逆に宗教的な原罪の押しつけや、愛国心の強要など、禁止されている教育勅語のような、強調してはいけないものもある。

(6) 怠けもの意識改革として、西洋文化の中には、人間の本能はすべて動物的で悪いものと信じ、それを今に引きずる強い傾向が続いてきた。フロイトや多くのクリスチアンの理論家は、人間の本能の制御とか否定的な動機を強調する文化をもつ、とマズローはいう (p95)。その中心をなすものとして、第 1 章で述べたように、アダムとイブが禁断の果実を食べて楽園を追い出され、すべての地球上の人間は原罪を背負うことになったといわれて以来、人間の本能の否定面を強調する傾向を今にまで引きずってきたのではないかと筆者は考える。

そうした陰湿な過去のコンプレックスを基礎とする心理学とは反対に、たとえばユングはフロイトのエディプス・コンプレックスを否定し、“人間は過去によって形成されるものではなく、その目標・希望・期待によっても形成される” (シュルツ p250) という。つまり運命は変えることができるというのである。これは同じく過去の原罪意識から離れられない、離れようとしなないフロイトとその主義者たちから決別したアドラーの、(フロイトの言うような)過去の経験によって自分の運命を受身的に決定せられてしまうのではなく、“自分の運命の決定に直接かかわることができる (シュルツ p 359-61)” という思想にも通じる。それとともに東洋では、古くは中国の王陽明の陽明学を通じて、また日本では江戸時代の封建体制の中にありながら、民衆信仰の中にもすでに天啓として、「心ひとつが我が理」として萌芽し、自分たちの運命を変えるべく戦ってきたのである。

(7) そんな中であって本能の肯定的な面に着目したのがマズローである (p23)。日本には教育ということばに見られるように、子どもには側面から教え、育てなければ、自力では何もできない怠け者という固定観念がいまだに大きく存在する。一方西欧では能力を教育ではなく、子どもの生まれつきもてる能力を「引き出す」ことに重点がおかれてきた。ピアジェは、子どもに教えてはならないという。自分で学ぶことをしないようにさせるからである。

また、彼らの性衝動に対する邪悪な観点にしても、これは性行動を人間の悪、原罪とす

るキリスト教の思想からくるものであり、心理学・言語学に限らず西洋のあらゆる学問は、この原罪意識を持つことが学問研究にあたっての根源となっているが、いつの時代にあっても、性衝動こそ人間の種の保存に不可欠な存在であることに、真っ向から異議を唱える者はない。

(8) 認知欲求、つまり人間本来の知的好奇心についての見解の改革である (p81)。実験によると、サルはパズルを解くために一生懸命努力をしようとする。たとえ報酬をすぐに与えられなくても、である。それはサルには生得的な好奇心があることを示す (p82)。また、人間は一見、言語能力を生得的に持っているように見えるが、サルさえもっているこの知的好奇心が人間の言語学習を支えることで、親との相互作用を通じて学んでいるのである。さらに彼らの愛情こそ、動物の時代から引き続いて生得的な性格を引き継いでいて、人間が互いに愛し合うことによって互いが満足感を保持し、それがひいては必然的に互いのコミュニケーションのための言語習得につながっているのではないか。

(9) 安定の意識改革について、人は安定には飽きがある。そしてほかにすることがなければ戦争を計画するか後退するか、それとも成長へ前進するかである。マズローにとって安定は後退を意味する (p95)。感覚刺激の遮断のある実験では、単調な環境はむしろ耐え難い苦痛の場であって、幻覚が現れたり洗脳されやすくなることが分かったという (波多野 p30)。

(10) 文化の意識改革について、たえず不安定な政治、文化、環境の下、たとえば男性的で粗野な概念が“勇敢さ”として優先され、逆に女性的な繊細さが“女々しい”ものとして下げられるような文化では、そうした面の成長、たとえば親切さや優しさ、同情、柔軟さといった概念は阻止され、抹殺される (p97)。例えば日本の英語教育では、カッコいいアメリカ英語が最ももてはやされ、日本的な英語は“どんくさい”ものとして不当に差別される文化の中に自らを置き、学習者のアイデンティティ、自己主張の大切さを認識する力を失わせている。

こうした無意味な古い伝統や習慣に縛られ、新しいもの、つまり刻々と変化する身辺に対しても、せつかく人間に本来備わった探索や好奇心をもって世界に対応することができず、怠け者にならざるを得なくなるのは当然である。世界では今も、発展国の知的自己中心的な人間たちが弱者を相手に戦争を繰り返している。そんな中でマズローの夢は、人類が今こそ自分たちさえ想像できない偉大な仕事をなし得ることを証明することだという。

(11) 愛情について、行動主義者は愛情・欲求を生得的ではないと反論するが、施設児童が同じ施設の年上の児童たちとの兄弟姉妹的な愛情を自然体で深く結ぶことで、精神病理的兆候を示すようなことはなかったという (p77)。アドラーは人間の愛情への欲求を生理的欲求・安全性への欲求・自尊心への欲求とともに人間の生得的な欲求とみなす。愛情

についてはさらに第 4 章の新生児の項で詳細するが、彼らは生まれつき愛情も言語をも受け入れる器、たとえば微笑反応などを持って生まれるが、彼らの愛情欲求を満足させる環境が貧弱であったり、不足しているとすればそれは自然と消滅すると考える。

(12) フロイトの言う、精神の病気を解明してこそ人間の真の精神的健康がどんなものであるかを理解できるようになる (シュルツ p341)、という考え方に対して、マズローは逆に、「人は精神の健康を理解できてはじめて精神の病気を理解できる (ゴープル p21)」、という論理を導き出した。そのためには向社会的先頭に立って自己実現している人々についての研究こそが、普遍的な心理学の科学的基礎になるというのである。

以上の 12 項目にわたるマズローの人間の心理学の体系をもとにして、従来の原罪的暗黒の心理学的思考観から脱却し、明るい世界へと駒を進めることにしよう。心理学はどんな人間をこの世に輩出することに貢献できるか。英語教育を通じてどんな人間を輩出することに貢献できるか。

Ⅲ. 心の自由の心理学

前章では西洋の心理学の源流が、人間にとって最も大切なアイデンティティのもとである「我が心の自由」を神に取り上げられており、その元で映し出してきたことは、自らを罪人とさげすみ、奴隷的に神に屈服し、極楽への救いを乞う人間の消極的な姿であったことを突き止めた。万人に平等な科学を基底として成り立つ学問の世界でも、われわれはどのようにもならない唯一神の原罪ののしかかったこうした状況のもとでは、周知のように、かつてはコペルニクスに始まり、ニュートンやガリレオ、ルターやヘルダーにその苦しみが痛いほどわれわれ現代人は理解できるはずである。それこそがルターが若き日に悩まされてきた原罪に対する意識 (松田 p96) である。

こうした西洋の原罪の考え方は、多くの東洋の人々にとっても理解できることではあるが、これを現実の学問の世界でおおっぴらに取り上げることはタブーであり、どの心理学史にもこの現状はあえて表面に取り上げてこなかった。マズローでさえ、この原罪意識の存在には直接触れることを憚っている。行動主義者のワトソンは宗教的神話、悪習などからの脱却を唱えた (シュルツ p228) が、あえて“原罪”からの脱却は避けたようである。

ところがフロイトの時代から現在にかけて振り返ってみると、この原罪意識は、人が快楽を求めることは神に対する冒瀆だという潜在意識という形となって前面に持ち出され、人間の心に改めて念を押すかのように原罪意識を推し進めてきたのではないだろうか。レストランに行くのは、美味しいハンバーグが食べられるという楽しみがあるからであって、不快な空腹感や緊張感を取りのぞくためという理由からは程遠く、そうした理論には屁理

屈という以外ことばがない。彼らの観点では、罪ある全人類はこの世を楽しんではいけないのである。

ここで筆者は前章で述べたようなマズローの改革のすべてを包括したうえで、その土台となるであろう最も根本的な改革を提唱したい。それは今までの陰惨な原罪による人間のどうにもならない原罪意識の払拭、すなわち宿命に挑戦する心理学の意識改革であると同時に、人間の本来持つべきアイデンティティの復活を指向する心理学である。

原罪意識の払拭

ルターと心の自由

西洋文明の根幹ともいえるキリスト教では、“人間は生まれながらにして原罪を背負っている”とか、“労働は神が人間に科した罰である”と、私たち日本人にとっては驚嘆に値する奇怪な迷信とも思えるような数々の教理が鎮座している。

宗教改革者として後世に名を残した M. ルターは、1507 年、司祭に登用された。当時の彼の内面の問題は、神は神聖であり「我が命ずるところを行え」と人間に要求し、さまざまな理由で人間が神の思召しに沿うことができなければ、これを審判し罰する神であったという。彼はこの神への恐怖から逃れようと修道の生活に励んだが、励めば励むほど神はいつまでも恐怖すべき神として存在、その悩みは長く続き、かえって苦しんだという（松田 p18）。

繰り返すが、キリスト教では人間は神の子といわれるほどに神に近い存在として認められる一方、人間はその心だけでなく魂にまでも浸透された原罪、足かせを伴ってこの世に生を受けるといふ。だから人間は自分自身が何を思い、行動するにも、ただ創造主である神に従わないことには、自分の力ではどうにもならないこの陰湿な運命ともいえる原罪が、たえず頭をもたげてくる。ルターが若いころ神の怒りや迷信を畏れた原因も、そして改革を狙った本心も、実はここにあったと思われる。

このことについて、ルターは自著『キリスト者の自由』の中で、キリスト者は自由人であって、誰にも従属しないと述べながら、実際には『奴隸的意志』では、創造主である神からは、人間は生まれた時から原罪によって心の自由を奪われ、無能力であるが、究極的にはこれを救うのは、ただもっぱら神の恩寵の独占的な働きに頼るしかないと認めている (p13)。被縛性と自由、この矛盾した 2 つ、それがルターの全生涯、宗教改革の歴史的な意義、その思想史的内容を理解する鍵ではないだろうか。

ルターの時代のキリスト教は、献金によってこそ功德が得られるという誤った教義が蔓延していた。こうした物質主義の権化として豪華絢爛たる祭壇と建築といったエネルギーの元となったものこそ、キリスト教の根本である「原罪主義」の考え方であろう。実

際、ルターの時代には、その手段を使ってペテロ教会を造るためのチケット、「贖宥（しよくゆう）状」が販売された。その説教とは、「お前たちの靈魂と、お前たちの死んだ親しい者の救いのことを考えないかね。後悔し、懺悔し、寄進料を払いさえすれば、だれでも罪障の許しが得られるのだ。…そもそもお金が箱の中でチャリンと音を立てさえすれば魂は煉獄の焰の中から飛び出してくるのだ。…贖宥状を買えば聖マリアを犯しても許される。…教皇の紋印で飾られた十字架は、キリストの十字架と同じ価値がある。」等々（松田 pp21-2）と、ルターならずともこれでも宗教かと、身の毛もよだつ非道な騙しの手口が使われている。

1517年10月、34歳、ここに至ってルターが世界に問いかけた『95か条の論題』が出現する。その内容は一言でいえば、神へのお供えに代わる贖宥状の紙切れ一枚で許されるものではなく、神から与えられたとされる人間の持つ「原罪」は、人間の心の悔い改めと神の意志によってこそ許されるものであるという。つまり重要なことは、彼が「原罪」の存在を如何ものとしがたく、肯定していることである（松田 p40）。これは後に『言語の起源』を著するなかで、聖書の「初めにことばありき」に直面するドイツの哲学者で牧師のJ.G.ヘルダーの苦悩（末延 2004 pp20-22 Suenobu, M. 2006 pp31-39 pp41-44 pp63-65）と一致する。

宗教のすべてが間違っているとは決して言うのではないが、二十一世紀の現在に至っても、彼らの「原罪」から逃れられないこの苦しみは、今もキリスト教の第一の根本教理として世界を暗雲で取り巻き込みながらも、第一線で君臨していることを見てもわかることである。受け取り方を一つ間違えれば、宗教というものはどんな恐ろしいことになるか。今まで日本でも多くのオカルトと呼ばれる数々の外来種の宗教が、こうした「原罪思想」を第一義として振りかざして、無垢の人々から金銭を筆（むし）り取り、奈落の底へと突き落とってきた。

キリスト教のある一派に、夢の中でキリストからの数度にわたる懇願で、自分と身内がキリストの後を継がざるを得なくなったと告白する教祖がいる。そこでは「万物復帰」という教理があり、この世のものはすべて神（＝教祖）の所有物であって、すべてはその持主である教祖の貸しものであるから、自分とその身内に復帰させなければならないという。人類は皆彼に財産を返還すべきであって、それに対してあくまでも執着するのは罪であるという。だから今こそ返済献金しなければ決して極楽には行けないという。“このことを知らないでいたあなたの先祖たちは地獄で後悔しながら苦しんでいる。それを救うのは他でもない、この秘密を知り得たあなたしかいない。でないとあなたの先祖から子孫たちも永遠にせめられ続けることになる。献金は今こそそのせっぱつまった唯一、最後のチャンスだ” というのである（cf. 松田 p22）。

イブとアダムをそそのかした邪悪な蛇を使ったこの“原罪商法”によって、彼らの毒牙にかかった無垢の信者たちの現世の生活そのものを現実の地獄に仕向け、献金に応じて家族を奈落の底に追い詰めて行く。神の子として人間としていかに生きるべきかを真剣に思惑する本当に真面目な人々ほど、この商法にかかりやすいという。かかった真面目な信者がネズミ講よろしく次にまた真面目な人々を捉えて献金させる。こうして崩落してゆく家庭が増え続けている。他方、本元でこの商法を仕掛けた教祖と身内の人たちは、信者から崇められながら、現世で極楽の生活を貪(むさぼ)っている。

では、キリスト教では人間の心はどうだろうか。ルターは宗教改革を指向しながらも、この点で今まで通りのキリスト教の教理を支持し、人間の心の自由が神に束縛されていることを認めざるを得なかった。その代わりに人間が神へ帰依することで神から最も人間として相応しい心の使い方が啓示されると主張する (p40)。ところが教会制度や儀式などは不必要であると説く (p53, p62)。この制度と儀式的排除という二つの表面的な改革がルターの成し得た宗教改革の骨子であり、彼の改革は、最も大切な心の自由についてはこれ以上立ち入ることを憚り、ここまでで終わっている。

そこで結論として、キリスト教では次節で述べる「心ひとつ我が理(自分の心そのものが、そのまま「理」)」とする人間の心の自由を掲げることなく放置され、わが身をわが身で苦しめている。人間にとって最も根本的に大切な「心の自由」の問題は、いまだに改革されないまま苦しんでいる。このような苦しみ(あるいははき違えて喜悅)のさなかにある心貧しい人たちに声高く「神は畏れるものであっても、恐れるものではない」「原罪」の轡(くつわ)を自ら外して、「心ひとつが我がの理」ほど強いものはない、と叫びたい気持ちにかられるのは筆者だけではない。

心ひとつが我がの理・天の理

さて日本では、厳しい封建制度の真只中にありながら、江戸後期以降の浄土系の民衆信仰の世界では、元はかつて王陽明の指摘した「心は我が理」という思想(吉田 2006 p111)を、思想を超えた天啓として、原罪や地獄どころか、天の岩戸が開くがごとくに、この世こそ極楽とする啓示が生まれた(末延 2004 p47, 2006 p68)。

こうして民衆の中に生まれ、育まれた神は、人間に原罪を説くような神でもなく、人間の差別はなく、人間の心の自由を束縛するような神でもない。それどころか、神は元は生命のない宇宙空間に地球を配し、神人和楽、ともに楽しみたいと、自分の姿に似せた人間を創造したという (p48)。そんな神が人間に原罪や審判など科するわけがない。民衆がその優れた直感でもって素直に慕う教理には、人間には原罪があって、神の存在なしには人間は無力だなどと決して書いてはいない。神によって創造された人間に、原罪などあ

るわけがないからだろう。

それどころか「心ひとつ我が理」(2004 pp74-84, Suenobu M.2006 pp102-113, 2017 pp93-96)である。これは人間がどんな心を持つかが、それを実行しようが、それは神への信心如何にかかわらず、すべての人間に神から許され、永遠に約束された最も大切な自由であって、たとえ神とてままだまに動かすことができない、神さえも束縛できない各人各様の心の持ち方の自由である。

それは神が人間に、一つの使いようによっては毒にも薬にもなる複雑な“玩具”(=ここ)を与え、それを思うままに自由に使わせる権利を与えたようなものである。だから封建の世界にあっても誰からの指図を受けることなく、人によってみんな違った使い方が自由にできる。そしてそこには、今世界が希求するアイデンティティ、「個性の自由」が、一世紀半も前から堂々と認められてきたのである。

しかし、たえずそこには必ず各人間の自己責任が伴う。人には皆、ちょうど孫悟空の頭につけられた輪っか(首かせ)のようなものであって、自分の心を悪用したときには、それは「ほこり」(「罪」ではない)と呼ばれ、これが積もると神から締め付けられるようになっていく。それが天からの手紙として、様々な病いや諸事情となって表れるというのである(2004 pp85-102, 2006 pp114-134)。

だから人間には心の自由があるからと言って、勝手気ままな心遣いでいいのではない。生身の人間には日を経るにしたがって自然にできるホコリの掃除をしなければ、心のほこりがたまってゆき、ついには悪因縁といわれるものになりかねない。それを払拭すべく、たえず前向きに努力しなければいけない。誠に道理にかなった、科学的とっていいほどの理論、人を励ます教理でもある。

責任があるからこそ“自ら”進んでこれをチャンスとして捉え、間違いを繰り返し試行錯誤しながらも、恐れや不安を克服(これは肉体的にも精神的にも健康であってこそできることだが)するために、天から神がいとおしく眺めてくれるこの世を、より平和に楽しく謳歌するために前進する。悪習慣を破るために努力する。それによって自分の運命をさえ自らの力で変えて神とともに楽しむことができ、神の念願である人間の「陽気ぐらし文明の世界」、つまり「この世の極楽」を実現することができる。教理のもう一つの要は、各々の身体は自然からの「借り物」であるという(2004 pp102-222, Suenobu,M.2006 pp134-283)。

次に死生観を比較してみよう。キリスト教では多くの場合、この世は地獄、あるいはそれに準ずるものであって、この世における人間の生は1回限りで、死後は神による『最後の審判』によって、天国か地獄かのいずれかに住まいすることになる、という悲しくも空恐ろしい、無責任な死生観である。人間を創造した神にしてはまるで鉄火場の世界で、

余りにも残酷ではないか。仏教でも多くの場合、当時の世相の影響もあってこの世を汚れた苦の世界とみなし、「極楽浄土」への往生、「転生」をめざすというように、いずれも死後は不安で残酷な印象、誤解を与えてきた。

一方、日本の民衆信仰の世界では、世間でいう「死」は「出直し」と呼ばれ、この世で借り受けて使い古した身体は、身体の消滅とともにいったんはお返しすることになるが、魂は永遠である。魂は身体を伴う場合もそうでない場合も、世界中の人たちが共に本来皆平等で、それは「人間の本体」であり、「その姿が心」であって「生き通し」といわれ、永遠に存在する。限りある身体の使用期間の終わりとともに、いったんは親神のもとに帰り、その後親神のはからいと守護によって、ふたたび新しい身体を借りて、この世で出発するという明快な見通しと希望を持つことができる (2004 pp74-84, 2006 pp102-113)。

教理は難解な「理」の解釈に明け暮れるのではなく、むしろこの世での日々の「行動」の中から見えてくるのが教理である。たとえば私たちは“人を助けて(こそ)わが身たすかる”ということを学んできた。また何びとからも束縛されない信仰であり、教育に対する考え方も、大人が教えることよりむしろ神から最も近くにいる子どもの持つ純真な「三歳ごろ」から学ぶことに始まる。

児童教育学者のJ.ピアジェが繰り返し“子どもに教えるということは、すべて、子どもがそれを創りだし、発見することを妨げることになります”ということばにあるように、一見逆説的ではあるが、大人による過度の教育は、子どもが自分自身で獲得するはずの様々な知識や良心を、教育という名においてわざわざ前もって強制することによって、妨害し、委縮させてしまうという理論に通じる。

教育者はそばからの助言をしても、それはあくまでも手助け(足場)以上の押しつけ、恩のあてつけであってはならない。教えるものと教えられる者との間には、人間として上下はない。子どもは教師の師でもある。理の重い、人からなるほどといわれるような人ほど、高慢であるどころか働き者で質素儉約し、後輩たちにその範を示すのが常であり、「なるほどの人」へとたどり着くまでの道のりこそが教育者たちの一番の展望であり誇りである。こうした「理」の根拠は、人間には心の自由なくしては語れないというところに行き着くからである。そうでなければ、元来人間の持つ当然の権利であるアイデンティティも多様性も語れない。

心の自由の心理学

今まで見てきたように、人間は自らの成長への本能が強いにもかかわらず、原罪の鎖から離れることができず、心理学の世界も伝統や習慣に流され、縛られる。新奇なものを探索する人間本来の持つせっかくの好奇心を、悪として否定し、そこから尻込みさせ、逃避

させるといふ、ありもせぬ原罪に呪われた西洋の宿命の伝統的心理学は、書物や留学者などを通じて西洋のみならず世界の人々を、歯止めなくますます消極的な世界へ引き込んでゆく傾向にあった。

こうした西洋の伝統的心理学研究の世界は、いずれも陰険な、人間機械論に基いた無味乾燥した世界であって、人間の行為や活動の消極的な部分ばかりを取り上げて強調する、消極的な負の心理学と言ってもいい世界であった。それに対して、むしろ人間行動の健全な心理学の世界、人間味ある積極的な側面を強調する世界に目を向けるべきだとする考え方が起こってきて、ごく自然な時代の流れであり、当然の道理である。その傾向を変えようと前世紀後半から立ち上がったのがマズローをはじめとする人たちであったことはすでに述べた。

第1章で述べてきた「原罪」の問題は前述のように仏教の中にも見出されるが、ここで筆者が改めて提唱しようとするのが、人間の精神の土台となるべき“心ひとつが我が理”の心理学である。何の束縛もなく、他の生命体と同じく大自然のなかに生まれ出た各々の人間が、その心まで神の言いなり、人の言いなりというのではなく、いわば自分のアイデンティティともいえる自分の「心ひとつが我が理」、という考え方に基づいた学問の意味をもつ心理学である。

東洋の思想である「心ひとつが我がの理」(2004 pp74-83)は、人間が何ものからも解放された本来の自由な人間性へと向かう世界観を持つ。筆者が提唱するこの“心ひとつが我が理”の心理学の根底をなすものは、「神は畏れるものであっても、恐れるものではない」と断言しておきたい。

人間観、観点の重要性

心理学という学問自身がどのような人間観をも持って臨むかによって、また教育の世界では、教える方と教えられる方の互いの善的な人間観、ひいては教育が向社会を目指すかどうかで、人間社会は違ってくる。しかしその場合も、互いに平等に心は各自の「心の自由」という根本前提が欠かせない。各人が持てる能力を活用する機会を機会均等に自由に与えるような教育に則った社会、自分の力が認められるそんな社会では、人間は動機付けられ、大いにやる気が起こるものである。

逆にそんな自由が与えられていない封建社会や階級社会、差別社会では、物理的優越性、既得権などの壁が立ちはだかっているために、個人がいくらかがいても認められないように仕組まれている。正しく言えば社会、宗教者、権力者たちがそのように仕組んでしまっていて、その中で人間自らが社会を狭く制限しているのである。このような圧力をもって動機付けを強要したり導くことは、特に教育の世界ではあってはならない。あくまでも学

習者の知的動機を尊重すべきである。そのために学問はもとより、心理学が人間の最も大切な心の研究を主眼とするのなら、どのような環境、どのような社会にあっても、それは全人類に開かれた学問であらねばならない。

逃げの世界から知的好奇心へ

伝統的なフロイト派の心理学では、人類は常に快樂を求め、恐れ、不安、苦痛から逃れようとするという (ゴープル p94)。中でも新奇なものを避けようとする保守性は、初めから適度に新奇なものを与えた場合でもすぐには探索が行われまいだろう。しかし、心我が理の観点に立てば、勇気、自発の意欲が湧くだろう。後述するピアジェのことば以前の乳児の身振りの観察にしても、何でも最初はそうであるように、慣れるにしたがって、母子相互の理解心が助けあう。

ことばを使い始めた乳児の場合、彼らの生まれ出たこの世に対する我を忘れての探究心は半端ではない。その場合、乳児はこれから起こるかもしれないあらゆる事態が安全かどうかを見極めるために、最も頼りになるのが母親だ。この世のただ一人の信頼できる親の目をたえず見て、自分の行動のよし悪しの判断を待っている。一方、親の方も目を離さない。こうした導きと包容力が子をさらに信頼させる。危険な場合は親が、「メッ」といってだめ押しをする。心の自由を生まれながらに与えられた乳児が、神の似姿をかたどって創造された母親と面している姿である。また乳児が大声で泣く場合は、これは警告であり、それを通じて幼児は周囲が危険かどうかを推し量り、助けを乞うためであったりする。

知的好奇心

日本が怠け者の心理学から脱出できない中であって、波多野はマズローとほぼ同じ時期に、「知的好奇心」(波多野 1973 pp58-70) の重要性を早くから力説した心理学者である。彼は、幼児は知恵がついてくると未知のものに対して恐怖感を感じるようになるが、同時に、人間の感情というものは本能的に「怖いもの見たさ」という「知的好奇心」に繋がるという。さらに人間は退屈を嫌うがそれは新たな知的好奇心を求めるからであるという。このように、人間は知的好奇心を武器に基本的情報獲得への抑えがたい、飽くなき飢えを持っている、と。この力強い励ましに、筆者も含め、教師たちの多くがどれだけ励まされてきたことか。

歴代の数々の飢えの実験で見られるように、情報を遮断し情報を得る機会が失われると、人間は無気力になることを教えてくれた。ところが、人間が本来持っているというこの「知的好奇心」は、学習者も周りの大人たちも共に「心ひとつが我がの理」の意志と勇気を持って実行すれば、彼らの学習は周りの環境次第で、とどまることなくさらに発展する積極

的な理論であると筆者は信ずる。なぜなら、それは束縄の中から生まれるものではなく、各自に心の自由があってこそ、知的好奇心は発揮できるからである。

とはいえ、そのような情報への飢えに乗じて、教育の世界で逆に何かを強制的に詰め込むとどうなるか。数々の実験では、そのような情緒不安定な場合、人間は暗示にかかりやすくなり、洗脳されやすくなることもわかった。たとえば英語教育のように、いきなり柔軟な頭にネイティブ英語を無理やり詰め込もうとすることが、どんな無残な結果を引き起こすかが明らかだろう。次は好奇心と向上心について述べる。

知的好奇心と向上心

神とのコミュニケーション

「知的好奇心」も、初めから必ずしも快あるいは不快な状況が続くとは限らない。人間には原因・結果という前後を予測する潜在能力が優れているので、後できっといいことがあるだろうという希望を、学習者が持てる余裕があるかどうかによるだろう。そんなことを探索するために、極上の例を一つ示そう。国を代表してオリンピックに向けて記録を0.01秒でも縮めようと努力している人たちは、重圧の中でどんな心理状態だろう。ミュンヘン・オリンピックの水泳競技の100m平泳ぎで金メダルを取った田口信教選手の実話である。

勝負は1mにつき2秒で、その100分の1、これを超えることだった。たったの2cmの差。2cmは運命であった。そこで彼は練習の合い間に便所掃除をした。「(もし神がいるとすれば)水泳しかできない人より、人の嫌がることをできる人に神は勝たせたいと思うだろう」と考えたそうである。オリンピックのように必然的に世界の強豪としての他者と競争する前提として、田口選手はこうしてまさに神の思召しに繋がれた心ではなく、自分自身の心を以って、すなわち、自分の“心ひとつが我が理”を以って神との対話をおこない、ついに金メダルに輝いた。

人間はどんな環境の中にあっても、“条件さえ整えることができる”環境にあれば活動的で好奇心が強く、向社会的な力を持っているといわれるが、田口選手は外部からいい条件が与えられるまでもなく、自分の自由な純真な心をもって神との出会いを自ら創造し、コミュニケーションを交わしたのである。これだけではない。人間の心というもののパワーを世界に披露し、そして勇気を与えた。そして何と言っても最も人々を感動的させたことは、彼が神とこうした対話ができることを私たちに教えてくれたことだ。

この話は大々的に報じられたものではなく、ほんの逸話として小さな記事で終わったが、こうして内発的に自分で自分を動機付ける「内発的動機付け (p70)」は、実にすばらしいではないか。そしてこうした選手の行為が模範となって、自分の行動に対して社会的承

認が得られることに喜びを持つ若者が、“喜ばれる喜びを感じる人間”に育ってゆくとすれば、なお素晴らしい。これこそ自らの「内発的動機付け」から「知的好奇心」に繋がり、それを勇気を以って「自分の心が我がの理」であることを信じたことによって神との会話を信じ、それを実行した結果得られた成果ではないか。

さて、田口選手のような結果が得られたことは、その前提として、この世に生を受け、家庭で、学校で教育を受ける中で多くの人々と出会い、さまざまな環境の中で影響を受けたことが挙げられるであろう。が、その中で人間は新しい何か、たとえば新しい経験や知識を得ることは、人間にとって苦しいことと取るか、楽しいこととするか。子どもたちの学校生活も取り方ひとつで、楽しくも苦しくもなる。

そうした経験や知識を得ること、得たこと自体が、やる前から、そして終わったあとで、やっていたよかった、という向上心を満足させることを予期させるような喜びを与えるような教育計画が必要となってくる。それは若者が日ごろから、田口選手のように、人間一人一人に与えられた大切な「心ひとつが我が理」の精神を土台として、それを発揮して自分自身の向上に挑戦する内的動機づけを自らの力で“葛藤”を持続させることの大切なゆえんである。

その一つに、教育が他者との競争の世界にどっぷりつかることに明け暮れず、子どもたちに自分の向上心を沸かせるには、自己目的性 (p72) を持った、自分の設定した標準、自己要求水準との競争、自己最高記録と競う、競わせるように仕向けることによって、効果的な動機付けが可能である。こうしたことを真剣に考えると、英語教育の場合、ことばのうまい下手を何十人何千人相手に、一斉に試験で競争させることに最大の重点を置く現今のマスプロ英語教育は、一面、どれほど問題が多いことか。相互のコミュニケーションの本質という観点から見れば、どれだけ陰湿で危険なことか。

その危険さを考える時、本章の最後にもう一つのエピソードを付け加えなければならない。20 数年も前だったがオリンピックの水泳選手の壮行会で、明るい声で「楽しんできます」と宣言した十代の水泳選手の一語で、死に物狂いで得た出場権を易々とはずされてしまった事件を想起す。その時の監督のことばが、“勝利を勝ち取るために国の代表に選ばれた者が、自分が楽しむとは許せない”だった。

そのころと比べれば、世の中も少しは住みやすくなったのかもしれないが、英語教育の世界でも、人によりよい成績を勝ちとるためにはいまだにこうした楽しみや遊びは不真面目なもののみなし、学習者のちょっとした誤った文章をさえ、まるで陰惨な割礼儀式のように切りつまんでいる。それはこせこせとした高校・大学の入試問題を見れば明らかだ。

このような環境では、社会的共存のために他者とともに自分の個性を相互に発揮するはずの大切なことばの学習の中で、他者を競争相手として向かわされる立場に立てば、不安

や恐れや苦痛から逃れたいと思うのは一人や二人ではないだろう。実は伝統的な怠け者の心理学は、上に立つ者が悪や罰ということばや脅しをつかって、結果的には人をやる気にさせなくなるように仕向けてきた心理学者たちの罠だったことがわかるだろう。

学習者たちを煽って、度を越えた競争心をあおることは、学習者の不要な緊張感をさらに高めるとともに、不安定で弱い初学者だけでなく、誰にとっても大問題である。それには人間は本能的に「心ひとつが我が理 (我が心そのものが、そのまま「理」)」であることを再認識させるために、できた時も、いや、できなかったときこそ、味方となって褒める環境、それに激励する、そのような環境と教育者がぜひ必要である。

IV. 新生児

いつから「人間」になるか

田口選手のような積極的な行動のもとになった活力とは何か。それは人間に本来備わったものだったのか。彼が生を受けた環境では両親、中でも母親を中心とした周りの環境が大いに影響を及ぼしたことであろう。本章ではヒトの胎児から乳児へと成長する間に、いずれは言語になるであろうその萌芽の発達が、どのような形でかかわってゆくかを検証する。

動物心理学者グッドールは人間の意味、その起源を探るために、人間に最も近い種の一つ、チンパンジーの群れに住み込んだという。類人猿学者の山極京大教授もその一人だ。人間文化に染まった檻に入ったチンパンジーには関心なかったのである。人間の場合でも胎児はいうまでもなく子どもの研究は、世界的に見ても最近まで医学の中でも華やかな研究の影となっていて、なかでも最も大切であるはずの胎児・新生児・乳児の心理的臨床発達研究はほとんどみられなかったという。

言語学の世界でも、大人のことばを分析して言語の成立が分かるはずがないのは誰が考えてもわかるというのに、この四半世紀にいたるまで、まったくといっていいほどに無視され続けられていた。本章では乳児の世界に入り込んで、どこに彼らのことばのもと、コミュニケーション生成の芽生えが潜んでいるかを探ることにする。

胎児の胎内生活

神戸で産婦人科医として全国に知られる三宅 (三宅 1983 p22) によると、母親は受精後 22 週ごろには胎児の胎動を感じ始め、初めて母親は自分の胎内一つの生命が宿ったことを実感するという。以降母親は胎内で胎児を育み、胎児との重要なコミュニケーション手段としての胎動に逐一身体動きとひとりことばで受け応え、時にはともに美しい音

楽を鑑賞し、励まし合いながら、新しい生命の誕生を目前に臨月を迎える。

胎児は十月十日間、母体の胎内で寄生生活を送りながらも、後に胎外に出て独立した生活を送るために、実は様々な準備をしていることが分かってきた。特に脳という中枢神経系では、総数 140 億と言われる神経細胞の数は、胎生 10 ヶ月間にほとんど具備されるという (p9)。この準備の驚異こそ従来心理学も言語学も教育学も無視してきたが、ここで明らかにしたい。

新生児とは 誕生の瞬間

三宅によると、新生児とは「母体を離れたその瞬間に始まり、独立して自分で自分を管理できる乳児に転換するまでに出会う様々な難関を克服するのに必要な人生のわずか 28 日間にある小児を指 (p19)」し、それは 100 メートル走の重要なスタートに例えることができるという。

新生児の出現は母体の陣痛から始まる。その際、三宅 (p20)、山内 (p11) の表現を総合すると、胎児は狭い産道を通過する際、母体の壮絶な腹圧 (りきみ) によって、ほとんど窒息状態で途絶えがちな酸素に悩まされ、骨盤との摩擦や、場合によっては臍帯がまとわりつくのを死ぬ思いで避けながら、やっとのことで外界の世界に迎えられるという。なかでも産道を通る際に最も強い圧迫を受けるのは、人間にとって最も重要な豆腐のように柔らかい脳髄である。

そして産道から出る瞬間「線路の切り換え」が行われる。その際、あらゆるものが準備されている。すなわち、身体自身がこの世とのコミュニケーションができるようにと準備していてくれる。ことばの起源における Preparatry Theory (末延 2006) の原初の姿である。魂だけではコミュニケーションはできない。身体あってこそである。10 億年も続いて大自然がそのための身体をこうして準備してくれているのである。

そして臍帯が切断されるや無酸素状態となる。その際、小さなこの身体は両腕を大きく開き、母親に抱きつこうとするかのようだ。この間に胎循環が肺循環に切り換えられ、この世で初めて自らの力で空気を吸いこむのだが、山内によれば、生まれても最初に息を吸うまでは数秒から数十秒かかり、“なにしろ生きられるかどうかはすべてこの瞬間にかかっている”という (山内 p33)。こうしてありったけの空気が初めて肺に入る。「まさにはっと息をのむ」瞬間である。そして次の瞬間、それを吐き出すと同時に上がる「産声」とともに、呼吸を始める。この転換の巧妙さ。

胎児が狭い産道を母体の“力み”に押し出されて通るとき、胎児の身体はまるでタオルを絞るようにきつく絞られる。その圧縮で、気道や肺に詰まっていた羊水がほとんどすべ

て搾り出される。そうすると、生まれ出てきた瞬間には、羊水がすっかりなくなった胸郭は、身体の弾力でもとの姿に戻ろうとするが、その時にこんどは搾り出された羊水とほぼ同じ量の空気が小さな肺に吸い込まれて、すっかり空気が羊水と入れ換わることになる。これは産道が狭いからこそできた技である。このときのようにすを山内は、「吸い込みたいのは空気なのだから、邪魔になる羊水を前もって効果的に搾り捨てておくというのは、いかにも合目的である。巧みな自然の仕組みに驚く」と書いている (p11)。

こうして出産。すでに臍帯が切られ、母体からの血液の補給を絶たれた新生児は、この瞬間から「自らの呼吸によって大気中の①酸素を呼吸し、②栄養として母から乳汁を吸乳し、③体温を調節し、④循環、⑤代謝を行い、⑥不要物を排泄し、⑦外界からの様々な試練に対して戦わねばならない。つまり受動的適応から能動的適応へと、瞬時のうちに切り換えねばならない。」(三宅 p11) のである。外界との自発的コミュニケーションの始まりである。

一方、子どもを産む母親には、「妊娠中にホルモン作用によって乳腺の発育が促され母乳の準備ができています」(p11) という。そしてこの両手を広げた新生児の姿こそ、モロー反応と呼ばれる原始反射の最初の出現であり、親への抱擁を迫る切実な姿なのである。この瞬間こそが、この世での最初の母子のコミュニケーションと言っていいだろう。ここでなにかあれば何重にも備わった failsafe (緊急安全機構) が働き、これが哺乳動物が 1 億千万年の歳月をかけて進化させてきた筋書であり、こうして「胎外生活への適応の 1 週間が過ぎると、新生児は子宮外生活への適応をほぼ終えている」(山内 p3) という。

呼吸

こうして肺に空気が入り、酸素をとり込めるようになると、肺の血の流れが効果的に行くから、肺が広がれば血流量がその分増える。つまり赤ん坊がいちど空気を吸っただけで血液中の酸素はすぐ増えてくる。このように身体がお膳立て、準備している。呼吸運動は呼吸中枢によって自動的に調節されるが、この場合、胎外へ出たとたん、ちょうどいい時に呼吸をするというタイミングが大切だという (pp10-19)。

聴・視覚と発声

聴覚・視覚

山内によると、新生児は出産後すぐ音源を探る行動ができる。胎内にいたときから長期間、こもった声ながら聞き慣れた母の声の方を向き、10 分以内ですでにヒトの顔を認識する。こうして聴・視覚の二つの感覚の統合が始まるという (p89)。

新生児の産声

産声とは、初めて息を出す声をいい、母音を基調とした第一声が上がる。それからオギャーになる。第一回の呼気で泣くという事はその時声帯を閉じているから声が出るという (p21)。

泣く行動

山内は「生まれて最初の呼気でアの母音がすぐ作れるのだから、まことに不思議である。驚くべき能力だと言った方が良いかもしれない。こうして新生児が何回か泣いているとあつという間に倍音構造の綺麗な声が出るようになってくる。そして個性というか、多様性というか、個人的特徴までが出てくるから驚く (p25)。」と。産院のベテランの看護婦さんは、どの子のオギャーとという声も区別ができるという。次に口唇から言葉へと進む。

レディネス

人間の赤ちゃんほど無力無能な存在はないと言われる。波多野は他の動物と比べて生まれつき備わった行動の仕組みが少なく、さまざまな能力の発達が極めてゆっくりで、しかも一人前の個体として生活していくに足りる行動能力は、ほとんどすべて経験・訓練を通じて獲得しなければならない (波多野 p79) という。

しかし見かけ上はそうであっても「潜在学習」は人間が特に優れており (ゴープル pp24-5)、当然動物心理学では実験できるものではない。たとえば身近な母親の行動を真似ることによる間接経験などによって、一度で覚えることもできる。しかし、実はすでに母親の胎内に在って、来たるべき胎外での生活のために様々な準備がなされていることは、心理学の世界でももちろん言語学の世界でも、今まであまり知られていなかった。これらは生命維持はもちろん、来たるべき人間特有といわれる複雑で深淵な言語生活のために必要な根本的な準備がなされているからである。ここではそれらを観察して行くことにする。

新生児の準備

新生児のために、母親のみならず胎児のために様々な準備 (レディネス) が順序よく施されている。たとえば、山内によると、母親には妊娠中にホルモン作用によって乳腺の発育が促され母乳の準備ができており、また新生児は子宮の中で寄生生活を送りながらも、胎外に出ていきなり空気呼吸をする前に、子宮内の羊水で呼吸様運動、呼吸の練習を行っているという (山内 p12)。

さらに、人間の胎児は恒温動物の仲間として自ら熱を作り出す機能を持っているが、いきなり外気に当たると冷えるので、新生児特有の分厚い褐色脂肪組織 (層) に包まれて生

まれ出てくるといふ (p43)。これらは確かにすでに胎内で外界のようすをにらんで耐えるべく装備・訓練しているのであろう。生まれてからでは遅いのだろう。神の技を感じないではおれない。

さて三宅によると、胎外での新生児の最初と作業は、すべての哺乳動物の習性ではあるが、母体を離れた瞬間、直ちに彼らが探し求めるのは母親の乳房である (三宅 p77)。しかし母親の乳首に吸い付くものの、時には眠ってしまう (p78)。母親はこれを不安がり、必要以上に人工乳を飲ませる。こういう悪循環がある。中でも未熟児等に対する強制栄養の行為は命取りになる。“体重の少ないものほど飢餓期間を長く保つことができる”という鉄則があることを知らないからである (p106)。ここで早くも思いがけない過保護教育が始まることになる。

微笑行動

微笑むという行動は社会的な、かなり高度な人間行動とみなされ、生後 1 週間以内の新生児がなんら外的刺激を受けないにもかかわらず、微笑行動を起こすことがあるという。この微笑行動は新生児が不規則なあさい睡眠状態にある時のみに起こる (p159)。しかしこの動作の意義が、生後 2 ~ 3 か月もしない間に、特に乳児が最も係わりの多い母親との相互コミュニケーションを行うために、どれほど重要な機能であるかが次第に理解されるようになるだろう。このことはすでにピアジェが行った母子の相互作用の項で述べた。

さらにこの微笑反応は、人間は猿の子のように母親にしがみつくことができないかわりに、自分にとってかけがえのない大切な養い手である母親からひと時でさえ見放されることがないように、最大の“引き留め技”とでもいうか、気を引くための高度な微笑ではないかとも考えられる。あるいはこれから人生で起こる楽しいことを想像しながら、その時の飛び切りの笑顔のために準備経験しているように見える。

また、新生児は生後数時間後には目が見え、新生児自身が持つ好奇心から、既に胎外の情報を探る傾向、しかも単純なものよりむしろ複雑なものへの好奇心がうかがえるという。また、山内は新生児が未知の人の顔を判別できるのはなぜかと問うている。が、説明のつかないことは本能だと決めつけると楽なのだが、これはやはり何かの準備理論かも知れない。この準備のすごさを心理学も言語学も教育学も無知、あるいは無視してきたというのが現状である。こうして胎児は母体の寄生生活を送りながらも、出生に備えて母親とともに共同作業で準備しているのである。

脳神経細胞の活動

さて三宅によると、自ら空気呼吸をし始めて10分もすると脳波が現われ、脳の神経細胞が活動開始する(三宅 p144) 一方、脳の中樞神経系では140億以上の神経細胞の数は、胎内での寄生生活の間に準備ができており、中でも神経系統の脳細胞は、生後一か月のあいだに目覚ましく活動するという(p116)。また、原初から本能を司る間脳あるいは脳幹部と言われる脳部位は、比較的早く成熟するが、知性や理性と関係のある側頭葉や前頭葉、新皮質のような脳部位は、社会的刺激を受けて、後から遅く成熟する(p148)という。

以上のように体内での十月十日、胎児が母親の胎内で過ごしている間に様々な準備をして来たことが明らかとなった。そこで考えるべきことがある。数え年とは広辞苑によると、「生まれた年を一歳とし、以後正月になると、一歳を加えて数える年齢」という。生まれた子どもを数える方法である。一月一日に生まれた子は、生まれたとたんすでに一歳になっており、12月31日に生まれた子は翌日は二歳となる。これは常識であった。今ではこんな数え方は西洋文明の中にうずもれて、失われてしまった。今は西洋を軸とした世界的傾向として満年齢といい、誕生日から数えて一年目を一歳とするようになっている。しかし実は日本の「数え年」には本章で見てきたような、深い意味があったのではないだろうか。

心の芽生え

山内によると、2ヶ月ごろになると母親の語りかけに表現豊かな発声で応答できるようになるといい、こうして毎日の母親の語りかけと、母親の表情・動作そして自分の声によって、聴覚と視覚のみならず触覚も運動覚もすべての感覚が統合されながら赤ん坊の心ができてゆくという(山内 p26)。乳児にとって外部からの刺激には、脳が積極的に反応する。母親がそれに向き合って本能的に対応し、そこに母と子の人間関係の基盤が形成されてゆく(三宅 p12)。

これが新生児の大脳皮質の発育を促進し、それに伴って母子の関係もより一層発展するのだが、この母子の非常に重要な心の繋がり、コミュニケーションの元となる関係性の研究は医学の世界でさえ、残念ながら今まで軽視されてきた(p12)という。乳児とはいえ、いや乳児だからこそ、本能的に愛されるだけでなく愛することも欲求する。愛情は互いに快いものである。このような人間として応答性と愛着の形成の最も重要な基盤となる発達過程が特に心理学、言語学の世界で無視されてきたことは、人類の大きな悔恨として永く記録されるであろうが、今こそ取り返さねばならないし、人間にはその力がある。

人間は他動物に比べて、両親からの育成や保護が長期にわたって必要だが、この長期間が意味するものは、人間では心身ともに果てしない可能性、なかでも柔軟性、弾力性が無

限に、しかもこの世界だけでなく宇宙までも縦横無尽に飛び回る人間の活動、その姿にはかならない。

本能から自立へ

ここからすでに新生児といえども誰にはばかることなく、すべての人間はそれぞれがアイデンティティをもって、「心ひとつが我が理」として、自分の思いを誰に制限されることもなく、自分で心身を操作し、好きなように使える状態が始まるのである。

この状態ですでに人間には「心ひとつが我が理」が任されている。このすごさ。キリスト教を主とする多くの宗教の世界では人間の心、運命は神にすべて任されているが一方、それをどう使うかの責任もすべて自分にあるという。どちらが有難いだろうか。人間は本来どちらを取ることもできるのであるが、諦めるか、それとも責任をもって勇気を持つか。さてどちらを取るか。

母子間の相互作用から始まって幼児は2歳もすぎると指さして「これなあに？」と聞く。そのうちに「なぜ？」と聞く。これによって思考も膨れ上がり、整理され統合する。これらは周りの環境の下でこそあれ、乳児自らに準備されたたった2-3年の間に“レディネス”という大自然の恩物の力を借りて自ら耕してきた、知的好奇心のおかげである。これをしかも苦痛を伴う訓練なしに、ほとんど遊びを通して知的能力の発達が行われる。この好奇心が向上心へと発達、それが乳幼児期の言語能力の習得へとつながるという（波多野 p86）。

さて、人間としてこの世こそが極楽だから、楽しい経験としての学習をしなければ損だという考えかたは、決して軽率なものではない。筆者の場合、恐縮だが、小学4年生で父から学んだニホン英語の素晴らしさである。英語学習は楽しいはずのものという信念があったし、今こそそれは数十倍にも膨れ上がってここにある。これを伝えるために残された命がある。それに対して、若き日に受けたネイティブ英語の物真似授業はいつも苦行であった。たしかにはじめのうちだけは無垢な幼児が蛇を怖がらないのと同じで、ネイティブ英語の物真似は物珍しいだけで怖くないだろうが、いつまでも同じ物まねが両者にとって楽しい経験だろうか。

昆虫や動物たちは生後、すぐに自力ですぐに移動できる。安全のためのこうした基本的な親子のコミュニケーションは早くからできるのに対して、人間の子どもは生まれた時には何もできないと思われてきた。移動能力も運動能力も動物よりも数段未発達で、親がたえず世話をする必要がある。中でも親子の相互作用に長期間かかる。

しかしこの乳児たちが、実は母親の胎外に出たとたんから、本章で学んだたように、生まれるずっと前から胎内で母親とともに育んできた、我々の想像もつかなかった驚くべき

数々の装備を使っていることが分かってきた。彼らがこの装備を使って高山を目指す姿が想像される。手足や五感といった身体的装備こそは自然が人間に与えた賜物であるが、いざそれを使いながら、険しい山を目指す気持ちにさせる元となる原動力は何か。それこそ母親の愛情をはじめ、励まし、保護といった周りの人々の助けから、社会的・物理的な環境の力を借りてこそ、その原動力となる知的的好奇心と向上心が発達するに違いない。

そのなかでも、人間にとって最も重要な学習の一つが母語の学習である。これも今まで多くの言語学者たちが考えもしなかったことが、驚くべき方法で、地道に学習されてきていたことが判明した。3 か月にも満たない新生児が、持ち前の知的的好奇心を膨らませて母親とともに学び合い、母語を楽しく学んでゆく中で、コミュニケーションの究極の目的である利他的・他愛的な優しい心までが育まれて行く。この姿を言語学者はどう見るか。

こうして学習を掘り下げ、多くの情報を共有しながら人類は、果ては海底から宇宙にまで様々過酷な条件でも、計りきれないほどの移動が可能となり、生きている限り向上することができ、無限の適応性がつちかわれ、それが知的遺産として次代に残される。そんな子どもたちを私たち教師は一人といわず、数十人をも毎日育てさせてもらっている。

V. 先見する「乳児身体言語心理学」

自虐的な言語観

日本は開国以来、国家は文部省を通じて、欧米の文明国英米を模範とするために、伝統的理論や怠け者の心理学のもとで、その国々の使う言語である英語を筆頭に、忠実に、ただ言われるままに文法システムを解剖し、そのルールを真似させておけばいいという考えを広めた。だから日本の英語教育は、たいていはその伝統的に守りさえすれば自分たちは安心して生きながらえるという生活観を持つ教育者たちで成り立っている。

英語は元来発音も文法もそれが育ってきた文化もすべて“英米の所有物”であるから、国家によって決められた英語という教科は、国家の計画通りに忠実に遂行されなければならないと文部（科学）省は単純に考える。これを朱子学的観点からすれば、日本人がアメリカ人やアメリカ英語を礼賛する根拠も、この「理」からいえば、アメリカ英語はアメリカ人のもの、それを日本人は使わせてもらうのだから、アメリカ人こそが親・君主・長であり、彼らこそわれわれが崇めるべき人々であって彼らの考えには従順であるべきということになる。

これは波多野によると、「見かけの内発的動機づけ」と呼ばれるものだが、「内発的動機付け」の考え方を求めるところには、労働者も学習者も、人間的に生きたいという望みがあるからだ。だが教師の中にはそうでない者もいる。今の方が封建主義の殿様のように、「統

制」がとりやすいから (波多野 1973 p177)」だという。試験に出るからやり、やらせる。つまり教師も生徒も自分を騙す。いまや人間教師が求められる。

LLAの誕生

さて以上のような英語教育体制の中で、1960年代の日本の英語教育は欧米、なかでもアメリカの視聴覚教育の重要さが議論され、英語教育においても LLA (Language Laboratory Association) の誕生を以て、言語の起源は nature か nurture かというような論争はやや下火となり、何よりも英語教育は今までの文法理論一点張りの教育から脱出した。そこでは文法理論よりもむしろ行動主義的な面を表に出して、厳密にまねることの正否は別としてことばの音声的な面の訓練をすることから始めようということから、視聴覚教育が盛んとなり実用主義的で活発な英語学習の世界が誕生した。しかし、中でもミシガン大学が構成したミシガン・メソッドは、ことごとく行動主義者の間違った英語教育として従来の英文法学者たちから否定された。

言語生得論の台頭

そんな中で、アメリカへの留学者たちによって突如日本にもたらされたチョムスキーの言語生成理論は、文法のための文法研究のためにはこて先の技術としてはある程度成果をもたらしたことは否めないが、言語生得論は、本質的に彼らに誤解 (チョムスキー本人のことばによる (チョムスキー 1989 pp179-82)) されたようで、若い学者たちの間では、早くから人間はハトやチンパンジーのようにわざわざ学習しなくても、ことばは生まれつきできる能力を持っているのだから、練習も訓練もさせる必要はない、とまじめな現場教師たちと学習者たちを嘲笑った。高校の教科書、現場の授業にも生成文法が現れるほどの盛況ぶりだった。これによっていままでこつこつと訓練・練習してきたまじめな生徒たちや教師たちをあざけ笑うように、この考えが日本中に蔓延し、ついには LLA も名称変更さえ余儀なくされた。

このように、新しい考えを持ちこんだ人々も、それを鵜呑みにした教師たちも、学問を、教育を自分で考えようとする心をもたず、ただ人真似という「怠け者」であったからこそ、自分で考えることをやめたのであろう。洗脳に染まり、思考停止したのである。こうして心理学の伝統的理論は日本の英語教育界では再び正当化された。そのころ、奇しくも日本の幼児心理学者たちは、心理学界のみならず、凶らずも言語学、言語教育学の根底を揺さぶる理論を黙々と、世界に向けて証明しはじめていた。

さて、言語生成理論の生得論を実証するために、怠け者の心理学からすると、言語学者が動物でもやる野蛮とも見える身振り研究など、言語以前の踏み込んだ探究をする気もな

く、あくまでも言語という土俵、手段を使って自分たちの未熟な理論を押しすすめた。それで通すには相応の理論が必要だが、人間の言語を説明するにはブラック・ボックスという便利な魔法の箱を使って生得性を仮定する以外に方法はない。

1970年代、ちょうどそのころ筆者は当時ハワイ大学に招聘され、東西センターで言語の誤謬研究と子どもの言語研究をしていた。そこでも日本ほどではないにしろチョムスキーアンで溢れていた。彼らから依頼を受けて、子どもに身体を使って英語を学ばせる筆者のカルタ式教授法 (*Card Game: Collocation Method*)、それに命令形から教える身振り反応を誘う TPR (*Total Physical Response*) 教授法を紹介したとき、それはチョムスキー学者たちから一斉に一笑に付された。

筆者の研究では、彼らのいう言語生得論からすると、命令形をつかうことが主語の省略形として最も複雑な文型として文法の最後に扱うべきものであると指摘され、その“高度”な省略文型をいきなり幼児の言葉の学習に使うことが彼ら自身の高邁な理論と合わない、その無謀さを揶揄されたのであった。それに、大学の教員がなぜ子どもの言語などを専門にやるのかと不思議がられた。まさに100人の言語生得論者を相手に、ただ一人立ち向かうことは至難の業であった。

言語生得論批判

日本を代表する幼児発達心理学の村田孝次は当時日本のチョムスキー・ブームのようすを自著で語っている。「チョムスキーを中心とする変形—生成理論の基本仮定の1つである言語生得論…によれば、人間は生まれながらに完全な言語能力を持っており、言語能力は獲得されるものではない。この考えを信奉する研究者にとっても、研究の対象は子どもの言語以外にはなく、その統語論的ないし意味論的な分析に終始することになり、母子相互作用や言語環境の研究はどんどん無縁のものと思われた (村田 p91-2)」と。変形文法理論に沸く彼らの言語学に取り組む粗雑さが、母子の言語発生以前の相互作用を見落してきたことが原因であることが明らかである。

そんな中で、すでに1945年にピアジェ J. が母子相互作用の研究の一環で発見した乳児の身体の模倣エラー例を紹介する。これは言語学者たちが無責任に提唱してきた安易な生得論を凌駕する一つの重要な証拠となるものである。彼らにはたかが子どもの成長段階から言語の起源が得られるわけがないという驕りがあったと思われる。

ピアジェの乳児身振り研究

ピアジェによると、幼児が他人の身体と自分の身体とが類似していることを発見すると、「私 (ピアジェ) の目の開閉の運動に相応して、被験者 J は、0歳11か月の時、自分の口を開閉し、L は0歳11か月の時、自分の手、それから自分の口を開閉し、そして T

は数日間目と口との混乱を続け…。このような模倣の誤りはきわめて示唆的なものである。(ピアジェ 1945 p83)」と。そのほか耳と鼻、舌出し指あげ、の混同などが見られたという。さらに音声面でも J は「唇をチュチュと音させるのをただちに模倣した。そして 0 歳 11 か月の時、[popo] という音を模倣 (p87)」したという。

J が 0 歳 11 か月の時、「私が手で、もう一つの方の手の甲をたたいた。そうすると J はすぐ私のしたことを模倣した。…私が小さいハンマーの頭で、金属鍵盤のキーをたたいた時にも、同じことがあった。(pp90-91)」その後、手を隠す動作を真似た。

その後、バイバイをする場合も、まず腕と手を動かすという大まかな大きな動きから、だんだんと独立して指のような小さい部分だけを動かして模倣する様子が見られたという。そこから模倣の第五段階に入ると、絵を描くことを模倣し、石けんで手を洗うことを模倣した。

問題はピアジェが一世紀近くも以前に実行し、観察したこうした一言も言語を話せない乳児とのやり取り、相互作用のコミュニケーションの動きを、言語学者たちの頭からすると、これをコミュニケーションと取るかとらないか、それに単に大人からの観点でエラーとみなすかどうかで異論を唱えるのは自由である。しかしこれらの乳児たちは間違いなく、やがては一過程とはいえこれをもとにいわゆる「大人語」に対するれっきとした「幼児語」、「子ども語」、そして日本人の場合、英語学習の段階で生じる「生徒語 (末延)」という、大人の言語とは独立した見事な言語を形成してゆくのだ。

そして「J が彼女にとって新しかった有意味のことばを事実的に模倣し始めたのは 1 歳 3 か月の時であった。すなわち子どもの自発的音素 (papa とか mama とか vouvou とかいうようなことば) と同じものではなく、大人のスピーチにおけることばである。(pp100-101)」という。そしてピアジェは、模倣の最後の第 6 段階では「内的に模倣」が可能となり、ついには「内的言語」が芽生える (p132)、というのである。

以上のような子どもの言語以前の模倣の段階を、言語学者たちが逐一観察する機会に恵まれない限り、机上の言語学者たちは子どもが 1 歳の頃から言語がまるで突然に生み出されたかのように錯覚し、そのために言語がまるで奇跡のように驚嘆し、それを生得的なものと考えてしまうのも無理はないことだろう。

このようにピアジェの観察をみると、言語が生得的なものであるという観点は揺らぐ。蜂のダンスが生得的なものであるのは、かれらのそれぞれの世代が独自にダンスを発明して言語を作り出す練習をわざわざしなくても、生まれた時から練習も訓練もしなくとも、その能力が備わっているからである。だから第一、人間の言語ももし生得的なものであればそんなにエラーをすることもないだろう。だが、筆者が提唱してきた言語準備説 (末延 2004 pp47-74, Suenobu 2006 pp68-101)、つまり人間には潜在的には言語のための道具して

の受け皿は準備されてはいても、言葉の試行錯誤、エラーを繰り返しながら自然体の学習、訓練によってこそ伸びるのである。

一方、言語の潜在的な能力はセットされているだろうが、人間にはことばが初めから生得的に備わっているからと、行動主義者たちを罵り、何も練習も訓練もしなくてもよいなどという軽はずみな言動を、生成論をはき違えた立場から論じるという、変形文法学者たちの台頭以来のこの楽観的な観点こそが、学習者たちの地道な英語の文型練習をさげすみ、日本の英語教育を誤らせ、悲劇をもたらしてきたのである。

母子相互作用の発見

さて日本の英語界ではチョムスキー旋風に沸き返る 1950 後半から 1970 年代にかけて、幼児心理言語学界はどうであったか。村田はいう。「わが国では母子相互作用や幼児の言語環境への関心がもり上っており、それらが乳児、幼児の言語発達に及ぼす影響を示唆する研究が次々と発表されていた (村田 1987 pp92-3)」と。続いて 1960 年には世界に先駆けて村田孝次の『育児語の研究』、61 年には村井潤一の『乳児の音声の記号化過程』、そして 1965 年には岡本夏木の「言語機能の成立過程— (そのⅡ) - 会話的行動の成立 -」に関する研究にその成果がはっきりと見られる。

ピアジェ以後、世界では母子相互作用をしっかりと観察して記録する幼児言語心理学者がほとんどいなかった中で、こうして遅ればせながらも、日本は前言語コミュニケーションの礎としての重要な母子の相互作用を、世界に先駆けて観察し始めていたことになる。一方、同時に日本の言語学界の中心はひたすらに西洋、なかでもアメリカの変形生成文法を追いかけていた。

そんな中で村田は変形生成文法の言語生得論を批判、「だから子どもの初期の言語発達の記述のためには、(変形生成文法理論は [筆者加筆]) 不適切なものであるという見解が近年ではよく聞かれるようになってきた。ここ数年来の新しい傾向の 1 つは、これらの追求の路線から一時離れて、母子相互作用そのものをもっと繊細に観察し、言語の発現時よりさらに時期をさかのぼって、前言語的コミュニケーションの中に言語発達の原点を発見しようとする傾向である。(p87)」という。

岡本夏木 (1965 pp73-79) は、この種のゼスチャーともとれる〈対話〉を次の 4 つの型に分けている。

- 1 自分の動作を使って人と〈対話〉する。
- 2 自分の発声によって相手の発声を促す。
- 3 対象に対してある行動をとり、そのことを相手に認めさせようとする。
- 4 対象を指さし、相手にも指さしを要求する。

以上の 4 つの型に共通に見られる特徴は、両者の会話の交互のやり取り (ターン・テイキング)が見られることである。しゃべる順序には<自分の番>と<人の番>があって、自分が喋れば次には相手にもしゃべる権利を譲るという、自然に備わったコミュニケーションの「交互発言権」を認識することによって、大切な社会秩序をも学ぶことになる。

このように、すでに授乳期の頃から頻繁に観察される主に身振り、目振りを用いた母子相互作用の発見は、子どもの言語獲得のためのコミュニケーション行動形成のまさに原点に当たるものであり、さらには言語学習観のピボットとなるという点で、大発見であった。このような「身振り対話」が今後、言語学だけでなくバーバリズムによって歪曲されてきた言語教育の根底を正しい軌道に戻すことに寄与すると筆者は確信する。たとえば *Total Physical Response Method* (末延 1979)、*Collocation Method* (末延 1970,1977) のような教授法を参照されたい。

母子相互作用と言語発達

乳児と母親の交互の中で、微笑みや身振りのやり取りに次いで、乳児が喃語^{なん}をしゃべるころになると、母親も同じ喃語で応答する。このようにしてグループ会話から小社会での会話へ、そして社会での会話へと進んでゆくのであるが、従来の心理学、言語学の立場からすると、“高度”な言語学の研究というものが、たかが乳児などから教えられるものは何もないという傲慢な考えから、乳児は大人が働き掛けない限りは、“教え育て”ない限りは自らは積極的に行動しないものとされ、乳児の言語発達の元は大人の積極的な援助からこそはじめて生まれる、と確信されていたようである。

さて、翻って現実の世界を見る時、このような純粋な人間の幼児のこの世の現実の世界の生育へのいとなみの中に、キリスト教の原罪や仏教の業の世界をどのように受け止めればいだろうか。子どもは発達過程で抵抗を示し、攻撃的で、非協調的だと見る世界では(ゴープル p109)、それは人間が勝手に想像する野性的で獰猛な動物にその源を発することになる。しかしそれは偏に全く別世界の、宗教という尊い名を借りてでっちあげた支配者たちの知的自己中心観から生まれた、人民を脅してその上に乗りかぶさり、自分たちさえがうまく生き抜くための罫であることが自明となって、本来、一般的にはそのような児童観は微塵も入る余地はないはずである。

村田はいう。「乳児は従来は受動的な存在だと考えられてきたが、これは事実ではない。…乳児の行動は想像より遥かに積極的であり能動的である。実は家族を支配するという面をも持っている (村田 1987 p85)」と。こうして母子の相互作用が開始され、これがやがて子どもに言語を獲得させ、言語によるコミュニケーションを起こさせる源にもなり、かつて乳児は大人の働きかけによって、はじめて人への反応をはじめる、といわれてきた幼

児心理学の考え方には大きな誤りがあることが、児童心理学者たちの中で理解され始めてくる (p85)。

母子の相互作用とは、ことばという道具によらず、母と子の互いの心から一番近い身体という道具を交わしてコミュニケーションをしている姿である。まさに言語を介さず、母子の心ひとつが理の世界である。この子たちに「原罪」などというものがあるなどとは到底信じられない。こんなものを造った人間が憎い。このような人間観は、封建制度とともに人類がねつ造した人類最大の負の遺産である。マズローが我が子を持って即刻、今までの陰気な心理学から脱出を決意したというのが、痛いほどよくわかる。天上から舞い降りたばかりの天使たちに原罪など相応しくない。

筆者は1979年当時、4人の幼児を持つ親として、母子が戯れるこの天使のような世界を次のように表現した。

「幼児は、大人と対応できるような完全な言語をもっていません。それでも親と子が communicate できるのは、言語以外の働き、からだの動きによる場合がほとんどなのです。つまり、幼児は親の音声による指示を、耳だけでなく、からだ全体で受け取り、からだを使ってそれに返答します。ここで面白いのは、親は、児童がからだで反応できるような指示を自然に使っていることです。たとえば、“さあパンツをはいて!” …このような命令文を使用します。(末延 1979 p61)」と書いて、これをもとに「乳児身体言語心理学」と名付け、なぜか同僚の言語学者たちから失笑を買ったことを思い出す。

母子は人類の長い歴史の中で何百、何千回と授乳し、おむつを替える中でこそ、このような貴重なコミュニケーションの威力を見抜く力を身につけるとともに、それを母親との「コミュニケーション遊び」の喜びを渴望する乳児に、まるで授乳するかのように応え、共に遊ぶ方法を見つけ出し、それを何でもない日頃の母子生活の中に、まるで当然のことのように取り入れてきたのであろう。

こうしたことに明確に気付くためには、母子の相互交流(作業)を、第三者、あるいは母親が故意に遮断したとすればどうだろう。これは実は過去において「ホスピタリズム」の実施によって悲惨な結果が出たことは、心理学者ならずとも誰でも知っている。大人の場合でもそうであるように、本来人間の自由であるべき言語による発言の禁止に、乳幼児は耐えられるだろうか。

この人体実験が日本の英語教育でニホン英語の排除、使用禁止というかたちで今も学校でも行われ、若者の人生を決定する入学試験等にも大きく影響を与えているというのが現実であるから、こんな恐ろしいことはない。このように考えれば母子の相互作業は、自然なものであると同時にコミュニケーションのために必然的な過程であるといえる。しかしそれは机上の研究では決して発見できないものである。

ここで母子の相互作用として見られることなどを、4人の子どもとともに、今8人の孫を持つ筆者の体験から記すことにする。

母子相互作用の表情事例

日常の母親と乳児の姿を観察していると、少なくとも30歳近くもの年齢差、生活経験の差のある二人に身振り対話が成立しているのである。これらには母親からの話しかけ、つまり発声が伴って働きかける。発声の内容などはもちろん関係なく、子どもが聞いていようがいよまいが、「いい子ねえ。そう、うれしいの。お母さんもよ」などと取り留めもないことをたえず話しかける。言語には嘘があるが身振りには嘘がない。

乳児からの反応といえば、そんなことはどうでもいいことで、もし乳児からの反応があれば喜んで応える。間違いないことは、乳児はその時間の多くを母親から目を離さないことだ。そして口元を見ながら自分の口元をもごもごしながら動かす。だが、そんな中で母親はたいていは顎を上げたり下げたりしながら、一人でしゃべり一人で答える。独り言をはなすことが多い。

しかし時には赤ちゃん用語で赤ちゃん口調。時には赤ちゃんにわかるはずのない他愛ないことを、一人言で質疑応答しがち。だから内容は無い。でも赤ちゃんはこちらのさまざまなゼスチャーや問いかけに、両手を挙げて、ケラケラ声を出して息を往復笑いしながら、内容をたしかめることもなく反応している。そこに母親が目を丸めてそれ以上の大きな反応をする。「コミュニケーション遊び」の喜びを共に分かち合っている姿である。

そんな日常の中で傍観者の私は時には大発見をする。私が舌を出すと、真剣に私の舌を凝視していた赤ちゃんが粟粒の混じった唾液とともに、ちょぼっとつつ真似をするかのように自分の舌を出すのではないか。偶然かと思って、もう一度。同じように舌を出し返す。こんな不思議なことがあるだろうか。赤ちゃんは自分の舌を一度でも鏡で見ているか知っていなければ、そんなことができる筈がないではないか。でも見たことなどないはずだ。それでもそれができるのだ。筒のような形にすると、同じく真似る。

近所のほかの赤ちゃんにもやってみると同じ反応をするのではないか。大発見だと思った。でもすでにピアジェは1945年に気づいていた(ピアジェ p58, 63, 74, 85, 113)。がっくりしたもの、自分は自分なりに発見した喜びは大きかった。それにしてもなぜ親の舌の動きを見て生後3か月の赤ちゃんが、自分の舌を同じように巧妙に操れるのか。目のパチクリはどうか。その他当時気づいたメモを記す。

1. 生後まもなく母が出した舌を真似て自分も舌を出す。
2. 歩けるようになると、「音を出さずにそろっと歩きなさい」という言葉を聞いただけで、抜き足、差し足、忍び足のための動作が、足先のみならず身体全体が、学ぶことなく

自然とその動作になる。

3. 学ぶことなくできることが多い。たとえば五感だけでなく学ぶことなく高所恐怖感、危機感をもつ。何百もの顔の識別ができる。これは本能的にも見える。
4. 彼らは生得的と思えるほどの洞察力、推理力、本能を持っている。
5. 口が楽器となっていていろいろなオトが出ることを知る。
6. 母親は幼児ことばをふんだんにまねている。ところが言語教育学者たちはいう。間違った発音や言葉は聴かせてはならないと。
7. フレーベル教育学ではことばを学ぶことはお花畑で花を摘んだりそれを編んだりするようなものという。
8. 目と目が会うと声をあげて笑う。私が目をくりくりして舌を出すと、しゃくりだすように両手を揺さぶるようにして大声を発する。これははじめから全く教えもしないのに乳児はコミュニケーションができていく姿である。

村田は育児言語の特徴を次のように挙げる (村田 pp98-99)。

1. ことばは単純。
2. 文法にかなっている。
3. 冗長形式。(筆者注：これでもかこれでもかとひつこく。つまりこのことが同時に結果的には言語の何かを知ることと、その存在意義を理解させることと、その練習、訓練となっている)
4. 反復形式。(筆者注：上と同じ)
5. 限定された文型を反復。(筆者注：上と同じ)
6. 子どもの言語水準に適合。(筆者注：自然発生だから、本質的に上から押さえつけるようなものではないのである)

これらの特徴は、日本人の話すニホン英語と深い共通点があると筆者は考える (末延 2010, 2016 pp25-31)。ニホン英語もこの育児語と同じように、大人の言語に近づくための一つの必ず通る道筋と考えることもできる。日本の英語教育では、この中間語を自然に学ばせないで、いきなりアメリカ英語、ネイティブ英語をやらせるから無理がある。ヘッケルの反復説で説かれているように、“個体発生は系統発生を繰り返す”という一つの言語発声の事例であると考えることができる (2012 p2)。

村田によると、母子は子どもが言語を使えるようになるずっと以前から、身振りによるコミュニケーションによって相互作用を行っているという。乳児は最初の伝達的な交換に主として身振りをを用い、母親の側の積極的な受容とリードによって、乳児の、一見何げない運動動作が意志伝達のための手段に移行していくのである (村田 p88) という。

さらに乳児の身振りは強弱の程度で 2 種類あるという (p89)。

1. ～を見よ、とか何かについて教えてほしい、ということを手伝うための身ぶり。
2. ～が欲しいあるいは～を見たい、～で遊びたい、といったことを手を伸ばして強く伝えるための身ぶりがある。

村田によると、例えば生後半年を過ぎると欲しいものを手づかみし、手渡ししようとさえする。次に、母親が指さし身振りを示す。乳児は初めのうちは直接母親の手や顔を見るが、次第に母親がさした指の指す方向を見るようになる。霊長類では目と目で方向を示すという高度な技術を駆使している。10ヶ月頃から指さし身振りを真似、一歳を過ぎるとさらにこれらを複数個つなげて示すという術もよく見られるという (p89)。

Turn-takingの学習

さて、1歳をすぎるところになると、親子の身振りや発声を通じて「対話」となり、自分の意志伝達の順番と相手の順番を知ることは前述した。つまり乳児には対話の基本的な成り立ち、意義というものが分かってくる。そのうちに乳児自らが率先して身振りや発声の対話を始める。これが交互に行われる。ターン・テイキングである。そうなるとこの母子の共通の産物である身振り言語は、乳児にとって社会性の芽生えとなる。いよいよ言語の始まりである。

村田によると、これらに世界的な普遍性が見られるということが分かってきたという (村田 p97)。つまり育児言語、母親言語は世界共通のものと言えらるかもしれないといわれ始めている。これらの相互コミュニケーションは人類の何千年も前から同じように続いてきたことであつたから、それは当然と言えらるかもしれないが、これを通じて争いの絶えない今の世界が、少し丸くなったような気がしないだろうか。

チョムスキーの言語生得論批判

以上、乳児の言語に至るまでの母子相互作用について述べたが、くり返すが、村田はそれを元に言語生得論を以下のように振り返りつつ批判する。「…チョムスキーを中心とする変形一生成理論の基本過程の1つである言語生得論の影響である。この見解によれば、人間は生まれながらに完全な言語能力を持っており、言語能力は獲得されるものではない。この考えを信奉する研究者にとつても、研究の対象は子どもの言語以外にはなく、その統語論的ないし意味論的分析に終始することになり、母子相互作用や言語環境の研究はほとんど無縁のものと思われた (村田 p91)」という。大人の言語を分析して得られた推論を、大胆にもそのまま乳児や幼児に当てはめるといふこうした暴挙こそ、こんな飛躍した致命的な予測を生んだのであろう。この暴挙が当時真面目に言語学習訓練をする全国の英語教師や学習者たちに一瞬にして広まったのである。

つまり、この理論からは、人間はことばの練習などしなくても、生まれながらにして完全な言語“能力”を持っているという誤解を生んだ。怠け者の心理学の復活である。その間、我々は確かに人間には一寸法師の打出の小槌のように、人間には言葉が自然に出てくるような魔力も、能力もあるのかもしれないが、所詮、振らねば出てこないのだ、と声をからして訴えたにもかかわらず…。

母親と乳児の言語コミュニケーション以前の相互作用は、なかでも母親の表情・語りかけといったあらゆる行為は、乳児から何らかの行為をひき出させる作用を持ち、その微笑みは乳児を安心させるとともに楽しくさせ、活動性を高め、反応性を敏感・活発にする働きがあるという。村田はつづけていう。「母子関係（あるいはこれに準ずる保育者と乳児との間の関係）にだけ見られる現象は、言語獲得の基盤となるべき、特別に親密な対人的コミュニケーションの様態を如実に示しているのであって、このことを無視して言語発達の規定因を論じることはできない。(村田 p91)」と母子間の相互作用の意義の重要性をはっきりと認める。ここで「非言語的コミュニケーションは言語的コミュニケーションの機能的な発生源であるという仮説」が生まれてくるが、村田は言語と身振りの関係をさらに研究する必要があると戒めている。

地球上のあらゆる生物のコミュニケーションを観ずれば、言語こそ、その深遠さは別として、非言語の範疇のごく一部として存在するものという考え方もあろうから、どちらが先とか上位とかも言えない。日本の幼児心理学者たちと並んで、早くから母子の相互作用の大切さを警告してきた言語学者ロジャー・ブラウンの著書『ことばともの』(p168)には、チンパンジーに人間の言語をじかに教えようとした人たちは、ことばの発声だけに集中したがほとんど成果がなかったという。心と身体による母子の相互作用の適用を無視し、回避したからだろう。このことは変形生成理論から派生した言語生成論による言語教育の失敗と、大いに通ずるところがあると筆者は考える。

VI. 結語

本稿で筆者が提唱したのが、人間の平和のための精神の土台となるべき“心ひとつが我が理”の心理学である。その観点は、アイデンティティと同等ともいえる自分の心を、神にとらえられたものとして見るのではなく、誰からの束縛もなく、完全に自由な自分だけのもの、たとえ身が滅んでも魂として永遠に生き続ける、つまり「心ひとつが我が理」、という考え方に基づいた学問の意味をもつ心理学である。

東洋思想の一つである「心ひとつが我が理（自分の心そのものが、そのまま「理」）」(末延 2007) は、本来、人間の心というものは何ものからも解放された本来の自由な人間性

へと向かう世界観を持つ。この「心ひとつが我が理」の心理学の根底をなすものは、「神は畏れるものであっても、恐れるものではない」ということを意味する。

それを証明するうちに、母と子の身振りと発声の相互作用の観点から、言語発達の原点が見えてきた。言語の発生は記録に残されているだけでも、すでに中国文明の中に見られる文字に見られるように、少なくとも 6 千年から数万年以上も前から、自然によってことばを生み出すために用意された耳、口といった器 (末延 2004 pp169-222, 2006 pp216-277) を巧妙に懸命に駆使して、人間の努力によって生まれ育ってきたものである。

以上見てきたように、言語が生得的に備わったものという確信も見当たらないで、ブラック・ボックス化したまま言語発達の規定因を、ただ難解な用語を使ってうやむやに論じ、学問研究を急ぐ様な理論を、言語教育の中に位置づけることはできないことが分かった。また、ことばの学習は、人間を本来怠け者と見る伝統的心理学の見方の中から、苦しみや強制によって行われるものではないどころか、それによって若い学習者たちがどれほどの精神的な負の面が生じ、また生じてきたかについても述べた。

人間というものは本来決して怠け者なのではなく、それどころか自分の心の思うままに、誰にさえぎられたり嚇されることなく、つまらない勉強はもとより、楽しい筈の遊びにさえも、自分が嫌になれば飽きてしまい、こんどは次に来るであろうより楽しい遊びや、意義のある勉強をしようと、燃えたぎるほどの向上心を持っている。

たとえばことばをむりやり暗記させられるような言語教育の方法にはすぐに飽き、未知のことばの類推力とか推理力を楽しむ高度な遊びこそが、生涯にわたって広い意味で活用され、人生におけるさまざまな類推力・推理力が持続する真の学習となってゆく。これこそが「心ひとつが我が理」から生まれる自由な心が産出する、知的好奇心のなせる業である。陰湿な罪や業の脅しに悩まされて挫折する前に、すべての人間が生まれながらにして平等に持つ「心ひとつが我が理」を謙虚に自覚し、実行すべきではないか。

そこから自然に生まれる「知的好奇心」という生得性の意欲があつてこそ、胎児の間から準備された「我がの理としての心」と、言語のために準備された身体の構造と機能に加えて、われわれの祖先が、まるでレンガを積むように地道に造り上げてきてくれた言語が、自然のうちに学べるのである。こうした言語観に基づいた言語こそが、人類が互いにこの世に仲良く生存するための、最も重要な賜物といえるのではないか。

教育、なかでも言語教育をはじめとする教育心理学の世界では、従来のような子どもが怠け者であるという設定から、人間世界を頭上から暗雲で取り巻いている怪しげな原罪や業の罫に振り回され縛られることなく、子どもたちのとどめを知らぬほどの知的好奇心の強さと深さ、そのはかり知れない希望の行方に対応するための認識とその啓蒙が、今全人類に求められる。

さて、言語の根源はどこか。的は人間の一番身近なところ、つまり新生児、乳児の心、三歳心と行動のすべての中にすでに散見されていたことが分かった。その的は世界を、言語をどのような観点のもとに見るか。それは純真な三歳心をもつ人間の心理の中にあることが分かった。単に人間間で天才と呼ばれる中からは生まれない。ことばとともに人々の平和を願うために、ことばを研究する者は、言語教育の天才である母親からはもちろん、これからは乳児から、子どもたちからさらに広く深く学ぶ時代がきた。かれらこそ神から一番近い存在だからだ。

人間は自分の心の自由から生まれた言語を、自分の思うままに、そして同朋のために自由に使えることによって、動物のように遺伝的本能に頼るだけでなく、後世のための知的で文化的な遺伝能力を宿している。万人に与えられた心の自由を、大いに駆使して開花させるための手段こそが知的好奇心である。水泳の田口選手のような個人の素晴らしい経験が、言語を通じて身近な人間間だけでなく世界人類すべてに共有され、ついには田口選手のように、「心ひとつが我がの理」に支えられ磨かれた人々の言語は、神との交流にまで及ぶゆえんである。

参考文献

- Brown, R.W. *Word and Things*, Free Press 1958. 『ことばともの一言語論序説』(石黒昭博訳) 研究社出版 1978.
- チョムスキー, N. 田窪行則他訳『言語と知識』産業図書 1989.
- Freud, S. *On Creativity and the Unconscious*, Harper & Row, New York, 1959.
- ゴープル F 『マズローの心理学』小口忠彦訳 産業能率短期大学出版部 1973
- 波多野誼余夫・稲垣佳世子『知的好奇心』中公新書 1973.
- 前田護郎『聖書』中央公論社 1995.
- Maslow, A.H. *Motivation and Personality*, Harper & Row, New York, 1954. 小口忠彦監訳『人間性の心理学』産業能率短期大学 1971.
- 松田智雄「ルターの思想と生涯」『ルター世界の名著』中央公論社 1969
- 三宅簾『新生児』パルモア1981.
- 村田孝次『子どものことばと教育』金子書房1987.
- 中西信男他『アイデンティティの心理』有非閣選書 1985.
- 長尾 剛『論語より陽明学』PHP研究所 PHP文庫 2010.
- 野口薫『心理学入門』有斐閣新書1996.
- 岡本夏木「言語機能の成立過程一(そのⅡ)－会話的行動の成立－」『京都学芸大学紀要』A(文科): 27, 1965.
- ピアジェJ.『模倣の心理学(幼児心理学1)』大伴茂訳黎明書房1988, 原題: Jean Piaget, *La formation du Symbole chez L'Enfant* pp.83-85(本書の元となったのは『児童の象徴形成』*La formation fu symbole chez l'enfant*,1945)
- シュルツD. 村田孝次訳『現代心理学の歴史』培風館 1986

- 末延岑生『ことばの元を探る一知恵と文字の仕込み』神戸商科大学研究叢書LXXI, 神戸商科大学学術研究会 2004及びグローカル新書 天理大学おやさと研究所 2005.
- 『ニホン英語は世界で通じる』平凡社新書 平凡社 2010.
- Suenobu, M. *Errorology in English*. Yugetsu Shobo, 2002.11.
- The Preparation Theory of the Origin of Language*, UH Monograph LXXVI, The Institute of Economic Research, University of Hyogo, Kobe, 2006.
- 末延岑生『英語学習ゲーム』共編 語研 1970.
- 『続・英語学習ゲーム—*The Collocation Method*』語研, 1977
- Pleasure Land in English*, 大塚高信監修共著 大阪教育図書
- 『千文英語』ユニコム
- 「Audio-Motor Approach について」(1)(2)『研究収録』第3,4号 1979-80
- 「英語学習におけるゲームと理論の実際(4)」『児童英語教育』第4号 日本児童英語振興協会1979.
- 「ニホン英語 (*Open Japanese*) をデザインする」(1)『芸術工学2011』神戸芸術工科大学 2011. また <http://kiyou.kobe-du.ac.jp/09/thesis/07-01.html>で検索.
- 「ニホン英語 (*Open Japanese*) の類型化研究 (2) (形態編)—アジア英語 (*Open Asian*) を礎として」『芸術工学2012』神戸芸術工科大学2012. また<http://kiyou.kobe-du.ac.jp/09/thesis/07-01.html>で検索.
- 「ニホン英語 (*Open Japanese*) の類型化研究 (3) —統語編 (語順)」『人文論集』第48巻 兵庫県立大学 2013a, 及び『日本語学論説資料』論説資料保存会第51号に転載。また<https://u-hyogo.repo.nii.ac.jp/>にてmineo suenobuで検索.
- 「ニホン英語 (*Open Japanese*) の類型化研究 (4) —統語編 (時制)」日本「アジア英語」学会 2013b.
- 「ニホン英語 (*Open Japanese*) の類型化研究 (5) —音声編」『人文論集』第49巻 兵庫県立大学2014, 及び『英語学論説資料』論説資料保存会 第48号「音韻論」の項に転載。また<https://u-hyogo.repo.nii.ac.jp/>にてmineo suenobuで検索
- 「ニホン英語 (*Open Japanese*) の類型化研究 (6) —歴史編 (イギリス偏向の英語教育—第二次世界大戦前夜まで)」『人文論集』第50巻 兵庫県立大学 2015. 及び『英語学論説資料』論説資料保存会 第49号」に転載。また<https://u-hyogo.repo.nii.ac.jp/>にてmineo suenobuで検索
- 「ニホン英語 (*Open Japanese*) の類型化研究 (7) —従米から屈米への日米外交」『人文論集』第51巻 兵庫県立大学 2016. 及び『英語学論説資料』論説資料保存会に転載。また<https://u-hyogo.repo.nii.ac.jp/>にてmineo suenobuで検索.
- 「ニホン英語 (*Open Japanese*) の類型化研究 (8) —日本人の言語観・言語教育観 (台湾統治時代の日本語普及政策から)」『人文論集』第52巻 兵庫県立大学 2017.
- 他「日本人の英語—その形態的・統語的特徴」『人文論集』31-1 神戸商科大学学術研究会 1995.9. 及び『英語学論説資料』第30号, 論説資料保存会に転載.
- 田中克彦『言語学とは何か』岩波新書2003
- 「現代言語学の不幸」毎日新聞1987.3.27
- 徳善 義和「原罰」ほか『世界大百科事典』Hitachi Digital Heibonsha, 1998
- 山内逸郎『新生児』岩波新書1986
- 吉田和男『現代に甦る陽明学』麗澤大学出版会 2006